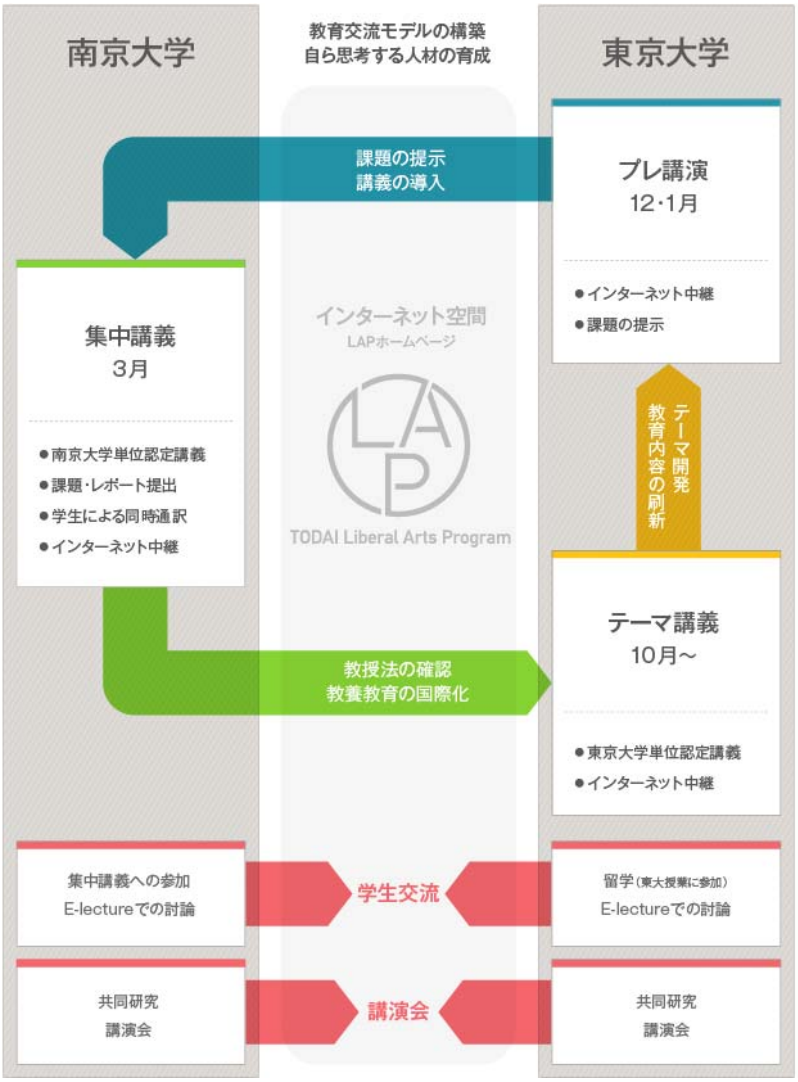
# リベラルアーツ・プログラム（LAP）とは

リベラルアーツ・プログラム（LAP）は、教養教育を通して自ら思考する人材を育成することを目標に、東京と南京で、プレ講演、集中講義、テーマ講義、そして学生交流を行っています。1 年を通しひとつのテーマを講義し議論することによって、問題に対する認識を深めると共に、学生の意見をフィードバックさせながら、より良い授業を柔軟に練り上げていきます。講義は、日本、中国或いはインターネット配信による双方向授業といった様々な空間や学生に対して行い、新しい授業形態や、多様な文化の中での教養教育の実践に寄与しています。これらの試みは、大学教育や教育の国際化に新たな方向性を提示し続けています。本報告集では、2010 年に行った南京集中講義「身体論」の講義概要と教員の意見をまとめています。

また、南京大学日本語科の学生を対象にした南京集中講義では、2010 年より東京大学学生の派遣を始めました。2011 年秋からは、南京大学の学生を受け入れる「東京大学 1 週間体験プログラム」を実施し、双方の学生が国外の日常的なカリキュラムを体験し、議論する場を設けています。真剣に議論をすることを通して、相手を理解し、信頼する新しい形の学生交流になると確信しています。

LAP は、外部資金の提供を受けて実施される東京大学教養学部の寄付プログラムです。プログラムの開始にあたり、上海で活躍されている東大卒業生の雪暁通史からご寄付をいただいています。

LAP プロジェクトの構造図



# 2010 年南京大学集中講義「身体論」

南京大学で行なう集中講義に、統一のテーマを掲げてみたらどうだろう、という話がもちあがったのは、2009 年の夏頃であった。統一テーマの設定に際しては、いくつかの要件を考慮する必要がある。まず、東京大学駒場キャンパスにおける教養教育のありかたや雰囲気を、たとえそれが多少は断片的になろうとも、できるかぎり南京大学に伝えるために、新しい知識の教授よりは、むしろ異なる視点、多様な思考法の提示に重点をおいた講義を、可能にするものであること。同時に、駒場キャンパスの特徴でもある「文系」「理系」双方にわたる多様な領域からのアプローチ、できれば領域横断的な新しいアプローチを、ゆるすものであること。そして、「学際的な哲学的分野を」という南京大学からの要望にこたえる講義をくみうるものであること。最後に、前年度までの集中講義の経験から、南京大学の学生にとってある程度なじみのある素材や「感覚」を出発点として議論を展開できるようなものであること。

これらの要件を検討した結果、今年度の統一テーマとして決定されたのが「身体論」である。

身体を魂の牢獄であると考えるにせよ、あるいは精神こそが身体をつくりあげるのだと考えるにせよ、わたしたちは身体と共に／として存在している。だからこそ、古代の神話から現代の SF 作品にいたるまで、わたしたちの想像力は、身体の〈拡張〉、〈加工〉、〈変容〉、あるいは〈異形〉の身体など、わたしたちが通常の身体のあり方として認識しているものとは異なる様態の身体を畏れつつ、それに魅了されてきた。とりわけ近年の工学技術、情報技術の発達、脳科学、認知科学／哲学の深化、さらには障がい学やクィア・スタディーズなど〈異なる身体〉から身体概念を問い直そうとする学問の興隆、それらと結びつく社会運動や芸術活動などは、相互に影響を与え合い、関連しつつ、わたしたちが何を、あるいはどこまでを〈身体〉と考えるのか、そしてそれがどのような可能性を開き、どのような問題をはらむのかについて、多様な考察をうみだしつづけている。集中講義ではこれらの学問的成果をふまえ、哲学、科学、障がい学、表象文化論などの領域を横断しつつ、〈拡張〉〈加工〉〈変容〉〈異形〉をキーワードとして、〈身体〉を考えるうえでのあらたな視点を提示することを試みた。

実際の講義題目も、ロボット工学やヴァーチャル・リアリティなどの一見したところいかにも「理系」的な領域から、認知科学や思想史といった「哲学」系領域、さらに、パフォーマンス・スタディーズ、障がい学、クィア・スタディーズなどの比較的新しい学問領域にいたるまで、きわめて多様なテーマを並べることができた。「身体」という一面ではきわめて身近な素材について、これほどに多彩でそれぞれに刺激的なアプローチを提示するのは、駒場での通常の講義においてすらなかなか容易ではなく、関係する諸先生の御協力に深く感謝をするとともに、この連続集中講義が南京大学の学生にとって、学際的な教養教育の可能性を実感し、すでに知っていると思っていたことがらを新しい観点から考えなおすおもしろさにひきこまれる機会となってくれたならと願っている。

LAP 執行委員　清水　晶子

# Nanjing-U Lecture 2010 "Theories of the Bodies"

In summer 2009, we started to talk about setting a unified theme for the annual intensive lectures at the University of Nanjing. We were aware that there were several points to take into consideration. First, one of our main objectives was to convey as best as we could the spirit in which the liberal arts education is conducted on Komaba campus. This implied that the theme should allow lectures with more emphasis on presenting various possible perspectives and ways of thinking rather than on merely giving out information and knowledge. Second, the theme should allow various interdisciplinary approaches, which is also one of the characteristics of Komaba campus. It was also important for the theme to meet the request of the University of Nanjing that the lectures should involve "an interdisciplinary philosophy-related field." Finally, our experience from the previous years strongly suggested that the theme can desirably be brought back to some concrete and familiar materials and "feelings," from which point the students can develop more abstract thinking.

It is in consideration of all the above points that we decided on the “Theories of the Bodies” as the unified theme for the 2010 intensive lectures at the University of Nanjing.

Whether we think of the body as the prison of the soul or constructed through the function of the mind, we all exist with/as the body. It is no wonder, then, that from ancient myths to modern works of Science Fiction, our imagination has both feared and been fascinated by those forms of bodies that are different from what we recognize as “the normal”: extended bodies, body alteration, transformation and deformation. This has become even more so with the recent development of engineering and information technologies, the progress in neuroscience, cognitive science and philosophy, and the rise of academic disciplines, such as queer and disability studies, questioning the existing understanding of “the body,” as well as the various related social and cultural movements. They have all worked together, interrelated and sometimes influencing one another, to produce various discussions about what it is that we consider as “the body,” what are the limits to “the body” understood as “the body,” what possibilities are opened up and what the possible problems are. Based on these academic achievements, the intensive lectures aimed at covering various related fields from philosophy, science, disability studies, to studies of representation and culture, and introduced four key concepts – “extension,” “alteration,” “transformation” and “deformation” – to help students find alternative perspectives from which to look at “the body.”

We were fortunate enough to put the above idea fully into the course syllabus, which demonstrated lectures in a remarkably wide range of academic fields, including robotics, studies on virtual reality, cognitive science, philosophy, performance studies, disability studies and queer studies. Even on Komaba campus, it would not be easy to put together in one course ideas and perspectives so varied and yet stimulating all related to one, rather familiar subject. I would like to express my gratitude to the professors who kindly agreed to take part in this project. I also hope that this lecture series has helped the students from the University of Nanjing experience the possibilities of interdisciplinary liberal arts education and the excitement of re-examining, from a different perspective, what they think they are familiar with.

The Member of the LAP Executive Committee SHIMIZU, Akiko

# 目次

リベラルアーツ・プログラム（LAP）とは ..... 1
2010 年南京大学集中講義「身体論」 ..... 2
Nanjing-U Lecture 2010 "Theories of the Bodies" ..... 3
講師紹介 ..... 6
プレ講演「身体論」 ..... 8

集中講義「身体論」講義紹介 ..... 9～46

**2010/03/01・2010/03/02** http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/nanjing_lectures/body_theory/100301/
國吉 康夫 ロボットにおける身体性と認知・行動の関係
国吉 康夫 机器人的身体性与认知、行动的关系
KUNIYOSHI Yasuo Relation between the Robot's Corporeality and Cognition/Behavior ..... 9
國吉先生インタビュー ..... 13

**2010/03/04・2010/03/05** http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/nanjing_lectures/body_theory/100304/
廣瀬 通孝 コンピュータと Virtual Reality
广濑 通孝 计算机与 Virtual Reality
HIROSE Michitaka Computer and Virtual Reality ..... 15
廣瀬先生インタビュー ..... 18

**2010/03/09・2010/03/10** http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/nanjing_lectures/body_theory/100309/
内野 儀 パフォーマンスにおける身体 ――1960 年代以降のアメリカ演劇を事例として
内野 仪 表演与身体 ――20 世纪 60 年代后的美国表演剧事例
UCHINO Tadashi The Body in Performance – through the Example of American Theatre from the 1960's onward ..... 20
内野先生インタビュー ..... 24

**2010/03/11・2010/03/12** http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/nanjing_lectures/body_theory/100311/
原 和之 思想史の中の身体 ――精神分析学を中心に
原 和之 思想史视野中的身体 ――以精神分析学为中心
HARA Kazuyuki The Body in the History of Thought – With a Focus on Psychoanalysis ..... 26
原先生インタビュー ..... 28

**2010/03/16・2010/03/17** http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/nanjing_lectures/body_theory/100316/

植田 一博 ヒトの認知に対して身体のもつ意味

植田 一博 身体在人的认知活动上的含义

UEDA Kazuhiro Meanings of the Body to Human Cognition .....30

植田先生インタビュー .....34

**2010/03/18・2010/03/19** http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/theme_lectures/body_theory/101208/

福島 智 盲ろう者の視点で考える障害学と身体

福岛 智 从盲聋哑人的视点考察残疾学与肢体

FUKUSHIMA Satoshi Disability Studies and the Body through the Eyes of a Deafblind .....37

福島先生インタビュー .....40

**2010/03/23・2010/03/24** http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/nanjing_lectures/body_theory/100323/

清水 晶子 〈わたしの〉身体と自己決定 ——トランスセクシュアル・インターセックスの身体から照射する

清水 晶子 “我的”身体与自我决定 ——对变性、双性身体的考察

SHIMIZU Akiko <My> Body and Self-Determination: Shedding Light from the Transsexual and Intersexed Bodies .....43

清水先生インタビュー .....45

編集後記 .....47

協力者一覧 .....48

# 講師紹介

**國吉 康夫**
**KUNIYOSHI Yasuo**

情報理工学系研究科知能機械情報学専攻人間機械情報学講座教授。

専門はロボット学・知能システム情報学。身体性に基づく認知の創発と発達、模倣の科学、ヒューマノイドロボットなどの研究に取り組んでいる。研究論文等約 450 篇、編著書 19 篇。日本ロボット学会研究奨励賞、同論文賞、佐藤記念知能ロボット研究奨励賞、IJCAI Outstanding Paper Award、ゴールドメダル「東京テクノ・フォーラム 21 賞」等受賞。

**原 和之**
**HARA Kazuyuki**

総合文化研究科地域文化研究専攻多元世界解析講座准教授。

専門は精神分析・フランス思想。精神分析を中心とした 20 世紀フランスの思想、メディア技術と表現の問題、もう少し大きな文脈では、「分析」の歴史を主たる関心領域として研究を進めている。著書に『ラカン 哲学空間のエクソダス』(講談社)、*Amour et savoir — études lacaniennes*, Collection UTCP など。

**廣瀬 通孝**
**HIROSE Michitaka**

情報理工学系研究科知能機械情報学専攻人間機械情報学講座教授。

専門はシステム工学、ヒューマン・インタフェース、バーチャル・リアリティ。著書に『バーチャル・リアリティ』(産業図書)、『空間型コンピュータ』(岩波書店)、『ヒトと機械のあいだ』(岩波書店)など多数。

**植田 一博**
**UEDA Kazuhiro**

情報学環／総合文化研究科広域科学専攻広域システム科学系教授。

専門は認知科学・認知脳科学・知能情報学。研究内容は人と社会の知能を科学すること。人間の高次認知活動の解明とその工学的な応用や社会への還元を目指して、認知科学ならびに認知脳科学の研究を行っている。具体的には、「消費者のアイディアに端を発したイノベーション」、「創造性の認知機構」、「速読や珠算などの熟達者の脳内機序」、「人工物に対するアニマシー知覚」、「視線知覚やバイオロジカルモーション知覚等の人の社会性認知」、「人同士のコラボレーション」等に関する研究を行っている。第 7 回ドコモ・モバイル・サイエンス賞・奨励賞(2008 年)、日本認知科学会論文賞(2004 年・2007 年)、日本教育心理学会優秀論文賞(2007 年)などを受賞。

**内野 儀**
**UCHINO Tadashi**

総合文化研究科超域文化科学専攻文化ダイナミクス講座教授。

専門は 1960 年代以降のアメリカ合衆国と日本の現代演劇を中心にした舞台芸術論。1990 年代以降のアメリカのパフォーマンス・アートの展開をポストコロニアル以降の批評理論や身体論によって歴史化すること及び日本の現代舞台芸術を欧米の理論的文脈に位置づけることに関心がある。著書に『メロドラマからパフォーマンスへ—20 世紀アメリカ演劇論』(東京大学出版会)など多数。

**福島 智**

**FUKUSHIMA Satoshi**

先端科学技術研究センター教授（バリアフリー分野）東京大学先端科学技術研究センター教授。

9 歳で失明、18 歳で失聴、全盲ろうとなる。指先に触れて言葉を伝える“指点字”というコミュニケーション方法を母親とともに考案、指点字通訳者を介しての同時通訳で日常生活を送り、企業との共同研究、行政への政策提言など、精力的に活動・研究を行う。著書に、『盲ろう者とノーマライゼーション ——癒しと共生の社会をもとめて——』（明石書店）など多数。受賞多数。

**清水 晶子**

**SHIMIZU, Akiko**

東京大学大学院情報学環／総合文化研究科表象文化論コース准教授。

英文学修士（東京大学）、MA in Sexual Politics、PhD in Critical and Cultural Theory (University of Wales, Cardiff)。主な研究分野はフェミニズム／クィア理論。著書に_Lying Bodies: Survival and Subversion in the Field of Vision_(Peter Lang Pub Inc, 2008)。

---

集中講義が行われた南京大学仙林キャンパス図書館大ホール

教室の様子

本集中講義では、試験的に BBS（交流論壇）を設け、講義レジュメのダウンロード機能の他、掲示板機能を通じ、講義に関する質問や感想を書き込めるようにしました。掲示板に書き込まれた学生の質問に対し、教員側から解答の書き込みがなされるなど、講義の中で収まりきらなかった内容についての質疑応答が、BBS を介してなされました。右はその BBS の様子です。

「身体論」BBS はこちら

http://kals7.c.u-tokyo.ac.jp/ealai5/htdocs/?page_id=19

# プレ講演「身体論」

2010 年 1 月 8 日（金）

2010 年 1 月 8 日、南京大学集中講義「身体論」に先立ち、駒場キャンパス情報教育棟遠隔講義室にて、プレ講演「身体論」が開講されました。プレ講演とは、南京大学で行われる南京大学集中講義のプレイベントで、テレビ会議システムを用いて南京大学へ中継し、東京大と南京大でリアルタイムに聴講できる講義です。「身体論」というテーマの中から、核となる文理の講義を選び、文系は原和之先生、理系は植田一博先生にそれぞれを論じて頂き、東京大と南京大の学生で議論を行いました。また、プレ講演に参加し、レポートを提出した東京大学学生の中から、3 月に南京大学で行う集中講義「身体論」への派遣者を選抜しました。

## 原 和之 「問題としての『身体』」 ——西欧思想史の観点から

「身体論」という議論の枠組について、西欧思想史の観点から考える。身体をめぐる研究は、医学、生理学、最近では神経科学、脳科学など自然科学の分野にすでに数多く見られるほか、哲学、社会学、文化人類学等の分野でも、「身体」を対象とした研究が数多く出てきている。今回の集中講義は、このどれかを取り上げるというのでなく、「身体」を主題に複数の講師がそれぞれのフィールドから講義をするという構成を取っており、これにはまず、「身体」がさまざまな側面からのアプローチを必要とする複合的な現象であるということがあるが、思想史的な文脈から言うと、そこにはもう一つの意味がある。プレ講演では、西欧における「身体」論の伝統的枠組である「心身問題」及び「身体としての身体」の出現などについて論じる。

東京大学の様子

## 植田 一博 「人の認知に対して身体がもつ意味」 ——認知科学の観点から

人間の身体がもつ意味や役割について議論する身体論には様々な学問分野からの接近が可能だが、プレ講演では認知科学や認知脳科学の立場からの接近に関するこれまでの試みについて紹介する。それを通じて、人間の認知や知能にとって身体がもつ意味を明らかにしていく。初期の認知科学においては、人間の頭脳のみが注目され、誕生して間もないコンピュータと対比される形で、人間の認知や知能の問題が議論された結果、身体が人間の認知や知能に対して重要な意味をもつという事実自体がほとんど無視されることになった。しかしながら、そうした知能観では説明できない多くの認知現象がやがて報告されるようになってきた。特に最近では、身体が人間の認知や知能に対してもつ意味が認知脳科学の観点からも議論されるようになったことを説明する。

南京大学の様子

集中講義「身体論」講義紹介

# ロボットにおける身体性と認知・行動の関係

國吉　康夫

2010 年 3 月 1 日（月）～2 日（火）

## 講義概要

実世界で行動する知能において、情報処理だけでなく身体性の効果が極めて重要なことが分かってきた。本講義ではまず、ロボットの認知や行動のために、身体の物理的・幾何学的性質がいかに重要な役割を果たすかを、ダイナミックな全身動作を具体例にして説明する。次に、行動や認知の発生・発達において身体こそが情報源となることを指摘し、身体から多様な可能性を引き出す原理を呈示する。最後に、人間型の胎児・新生児発達シミュレーションを紹介し、「身体が脳をつくる」という新しい考え方を説明する。この考え方は、人間の知能の原理解明に新たな光を投げかけるだけでなく、従来の固定的プログラム方式と全く異なる柔軟で適応的なロボット知能の実現に向けた新たな方法論にも結び付くものである。

## 知能のパラダイム転換

この講義を通じて、人間やロボットの知能に関する新しい考え方を伝えたい。それは、従来の考えとちょうど逆に、知能は脳が創り出すのではなく、環境と身体から発生するということである。では、なぜこのようなパラダイム転換が必要なのか。

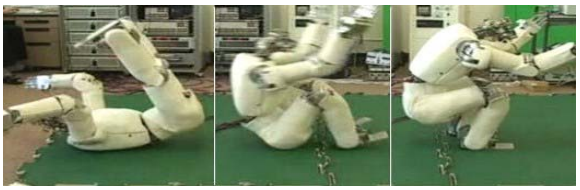
従来のロボット研究、人工知能研究は、行動や言語活動そのものの外見をデザインすること、具体的にはプログラムによるフィードバック制御が主流であった。しかし、そのようなロボットや人工知能は、足がつまずくとか、話題の転換といった、事前に想定したシナリオから外れた入力（外乱）に対応できず、システム自体が破綻してしまう。従来型の人工知能とロボットの研究を続けていると、その行き詰まりを痛感させられる。そこを出発点に、「行動の外見をデザインするのではなく、行動が生まれてくる原理を、しかも最小原理として見出す」というロボットの新たなパラダイムに行き着いたのだが、その最小原理とは、「身体性からの創発」である。

この原理を突き詰めれば、必ずしも脳（プログラム）は必要ではない。脚の関節・筋肉構造を模した跳躍ロボットは、複雑な制御なしで、その身体自体に適切な動きを生み出す「賢さ」を持つ。

## 身体構造に基づく「コツ」だから理解できる

実際に人間型の身体を持ったロボットをつくり、それを実世界内に実在させて動かしてみるということは、人間の心や知能とは何か、という問題を考える手段でもある。

仰向けに寝た状態から足を振り上げ、反動で起き上がる Roll and Rise 運動をする「起き上がりロボット」を作る。



人間の場合の動作を調べると、手足の振り上げには自由度がある半面、お尻が床を離れる瞬間の腰・膝の角度に厳しい制約がある。ロボットの場合も、体表面の触覚センサで関節を制御し、この条件を満たすようにすれば、確かに成功する。

動作に厳しい制約条件が課される箇所を「ツボ」、この条件をクリアするやり方を「コツ」と呼ぶことにしよう。この「ツボ」は、他者の Roll and Rise 動作の成否を判断する際の目の付けどころでもある。つまり、行為の実行ばかりでなく行為の認知においても、同じ「ツボ」が重要な情報を担っているのである。

「ツボ」と「コツ」は、ロボットと人間とを問わず、人間型の身体であれば共有可能であるような、身体それ自体がもつ情報構造である。人間が自らの経験を頼りに他者の行動の意味を理解し通じ合える、コミュニケーションの根底にも、身体の類似性に基づく情報構造の共通性があるのではないか。

## 動作の模倣と「意味」

動作において身体性がもつ賢さや情報構造だけでは、言語や社会性を含めた知能との間にまだ距離がある。そこで身体と

言語をつなぐ中間項として、動作の「模倣」を考えたい。

子供が母親の落葉掃きを模倣するとき、動きの表面的な模倣（モップを振るだけ）、動作の効果の模倣（箒で落葉を掃き「散らかす」）、目的の模倣（塵取りを使う）など、そこには幾つかのレベルがある。つまり動きの単なる模倣ではなく、相手の動作にどのような意味を見出し（認識）、それを自分の身体においていかに実現するか（身体動作）、この関連付けが人間の知能において本質的に重要であるらしい。ここで動作の意味とは、既に見たとおり身体が実世界内部に存在することで、初めて生み出されてくるものである。

実際、発達心理学でも、言語獲得の直前に模倣行動が発達することが知られている。人間の子供のように何を模倣するのかを段階的に学習するロボットを作り、身体性を心や知能、さらに社会性へと拡げてゆくことも、研究目標の一つである。

## 身体の駆動による意味ある動きの創発

そこで次に、意味のある動きを生み出すにはどうするかということが問題になる。動作の基本単位を予め与えておく、従来型の探索学習では、身体の可能性を活かしきれない限界があるためだ。

そこで、カオス写像をロボットに繋ぎ（カオスを身体構造によって結合するカオス結合系）、あとは身体の特性と、環境との相互作用に任せる。すると、身体各部が自然に協調し、意味ある動きが「創発」する。人間の脊髄の神経細胞の信号は、ある状況下でカオス結合系の特徴を示すことが知られているが、特に人間の新生児のいわゆるGM（General Movement）とよばれる動きは、このようにして創発するのではないかと考えられる。

## 赤ちゃんロボットを作ってみよう

胎児の脳神経系の発達を、コンピュータ・シミュレーション上で再現してみよう。神経細胞（非線形振動子）を含む胎児の身体、および子宮内環境をモデル化して成長させ、出生後は平地に置く。すると、特定の動作についての筋肉の動かし方はプログラムしていないのに、寝がえりやハイハイなどの運動が自然発生し、さらに大脳上に身体図式が獲得される。どうやら子宮内で手足を動かし、子宮壁にぶつかることで、身体各部の関係を理解するらしい。このことから、身体の運動こそが認知系の発達の基盤であり、さらに身体像の獲得、他者の認識を通じて、人間らしい心にまで繋がっていくと考えられる。

## 「見て」「模倣し」「学習する」ロボット

生まれてすぐの、鏡を見たこともない赤ちゃんが、特殊な表情まで模倣できる現象がある（新生児模倣）。そこで一歩進めて、視覚で捉えた動きを模倣するロボットを作れないか。

自らの動きを見ることのできるロボットを作り、身体像を獲得させると、実際の子宮内の赤ちゃん（眼が見える）と同様に、視覚と動きの情報を統合して学習できる。このロボットは、眼前の他者の動きに「つられて動く」が、これはサルの脳で発見された、他者の動作を見ると自分が動くときと同じように発火する「ミラーニューロン」現象を再現したことになる。

サルのミラーニューロン存在部位は、人間では言語を司る「ブローカ野」に相当する。このことは、「他者の動作を自分の動作と見なし／模倣して学習する」という身体に根差した認知が、言語やコミュニケーション、さらには相手の行為からその心を察するといった人間的能力にもつながっていることを示しているだろう。また実は、数や空間などの高度に抽象的な概念さえ、指の動きや身体図式から生みだされると考えられるのである。

### 質疑応答

Q.　ロボットの犯罪可能性についてどう考えるか。

A.　ロボット倫理の議論は始まったばかり。自動車の自動運転の例と同様、工学的・技術的可能性とは別に、法律や社会的責任に関する議論と制度構築がこれから必要である。

Q.　ロボットは好き嫌いなどの感情を持ちうるか。

A.　プログラムによらない情動の自律的発生は難題だが、善悪判断を含む人間らしいロボットを作るには極めて重要な鍵。

Q.　先生がロボットを作るのは、将来的には人間のパートナーとするためか、それとも道具としてか。

A.　これもロボット工学者や、私個人で決められる問題ではなく、社会が決める面が強い。皆さんにも考えてもらいたい。

Q.　ロボットが人間と同様な深い感情を持ち、藝術や文学の鑑賞などをすることも可能になるのか。

A.　ロボットが人間と同じ身体・成長過程を持てば可能であろう。しかし、それはもはやロボットというより「人間」である。

（文責：杉谷）

BBS（交流論壇）より

◆ 南京大学学生

在國吉先生的讲座中提到，现在日本正在研究用于照料老年人或者身体不便者日常生活的机器人，那么如果将来真的能够普及到日本人的生活中的话，那些整天只能对着机器人的老年人不会感到寂寞吗，这样是不是太缺少人文的关怀了呢

國吉先生の講座のなかで、日本では現在、老人や身障者の日常生活の世話をするロボットを研究しているというお話がありましたが、もし将来実際にこれらのロボットが日本人の生活のなかに普及したとすれば、一日中ロボットとだけ向き合っていなければならない老人たちは寂しく感じないものでしょうか。これでは、人間的な配慮が欠けているということにはなりませんか。

◇ 國吉先生

これ良い質問ですよね。だけど今実際日本の老人にはほんとうに独居老人が増えていて、ロボットがいたほうがまだましな状況なんです。少なくともそこに何か誰かがいて、動いていて、こちらの呼びかけや働きかけに応答してくれるだけで、だいぶ助けになる、精神的に支えになるということはあると思うんですね。もう一つはアシスタンスの場合でも、実は、多くの方は体が動きにくくても、ちょっとモノを取るとき他の人を呼ぶことはしたくない、他の人間に迷惑をかけることは、我慢しちゃう。そういうところでは、むしろロボットのほうが気楽で、その人のためになるということはある。もちろん、人間的なファクターはロボットでは書ききれない。しかしそれを無しにしようというわけではない。それと、色々な技術があって、遠くの人が、遠隔的にロボットの体を借りてやりとりをしよう、ということももちろん考えられています。それは人間的でないと思うかもしれないけれども、ただの電話よりは、そこに振る舞いがあって動いていると、やはり存在感を感じる。その意味で、良い面があるかもしれない。いま実際に技術はあるので、これから実際それが人のためになるのか、皆で検討していくべきだと思います。色々な可能性があるということは視野に入れておいてほしいですね。

◆ 南京大学学生

国吉老师介绍的内容，大多数都和直接的成果相关，的确都是非常了不起的成绩。作为一个不是很懂电子科学的学生，我想了解一下科研背后的故事，比如发明某种机器人的出发点，针对某一个功能的设计是根据什么需求或者是什么根源而得出的。

其实这些讲座设计的艰深的科学知识比较少，并不是那么难懂，但是可能语言方面的关系，国吉教授的课听下来有些吃力。再次感谢老师们和同学们的辛勤付出！谢谢！

國吉先生の講義が紹介してくださった研究内容は、その多くが直接的な成果に結びついており、非常に素晴らしい成果を収めていると思いました。あまりエレクトロニクスなどが分からない文科系の学生として、私はこうした科学的研究の背後にある「ストーリー」を知りたいと思います。例えば、ロボットを発明しようとした出発点は何なのか、ある一つのロボットの機能が、どのような要求に基づいて設計されているのか、あるいはどのようなところからそのアイディアが得られたのか、などです。

今回の講座においては、難解な科学知識は比較的少なく、それほど難しいものではなかったのですが、ただ言語の問題で、國吉先生の授業はやや苦労しました。 ここに、先生方と学生の皆さんのご努力に感謝いたします。有難うございました。

◇ 國吉先生

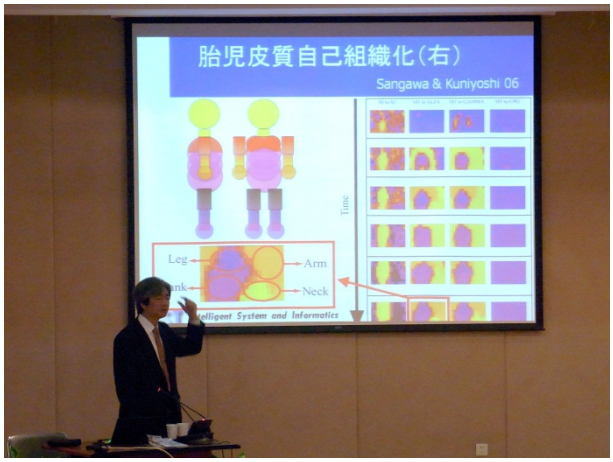
鋭い質問ですね。これにちゃんと答えるのにはレクチャーが必要ですね。端的に答えると、「人間に近い機械を作りたい」ということが第一ですね。人間がどういう仕組みで振る舞い、考えているのか、そういうことを明らかにするために、実際にそれを作れるか、ということを試してみる。ある仕組みについて仮説があるとしたら、その仮説に基づいて作って、それがヒトに近い振る舞いをしたらその仮説はかなり正しい、というような、「人間を知るため」という動機が大きい。ロボットの色々な要求や仕様の基準になっているのは、「人間に近いやり方だろうか」ということ。これが私の場合は基準になっています。もっと広く言うと「生物的な原理かどうか」ということになります。

◆ 南京大学学生

非常感谢贵校各位有名的教授来到南大为我们做讲座，让我们对现在的日本科技的发展有了一些了解，由于不是理工科专业，有些专业术语或者深奥的原理不是很明白，但还是非常感慨日本科技的发展以及日本的创新能力，我想这是不是正是因为日本人平时非常注重细节的原因呢

貴校の有名教授の方々に南京大学の私たちのために講座を開いていただいて、大変感謝しています。今回は今の日本の科学技術の発展について幾らか理解することができました。理工系の専門ではないので、専門的な術語や或いは難しい理論についてはよく分からない部分もありましたが、やはり日本の科学技術の発展と、イノヴェーションの能力には感嘆させられました。私は思ったのですが、これは日本人が日常細かい点を大切にするという原因によるものでしょうか。

◆ 東京大学学生




今までの科学では、天体や物体の運動、あるいは光の反射など、無機物中心に発展してきた観がありましたが、これからの科学はそうではない。人間について、特に、人間がどう考えるか、どのような感情を抱くかについて(恋愛などの問題も含まれるのではないでしょうか)、人間はどのようにして胎児から成長し、身体の制御の仕方を学ぶのかなど、今までの科学が考えてこなかった問題を扱う時代が来たということです(その際、脳や DNA を中心に考えない点が國吉先生の優れた点だと思います)。人間の感覚というものは人によって違います。僕がいい匂いだと思ってつけている香水が、他人にとっては臭いかもしれない。こうした、人間によって感じ方の異なる、曖昧な問題をこれからの科学は扱おうとしているのだという気がしました。國吉先生が言及されていた、カオスなどの非線形科学は、そうしたものに対する一つのツールになってきたものだとも思いますが、それにあわせて文系と理系の垣根を超えた新しいやり方が模索されていくべきだという必要性を強く感じました。

◇ 國吉先生

まさにその通りです。一言コメントするならば、従来の工学的なやり方というのが、ある作業をするとか問題を解くにしても、答えが一つに決まっているとか、最適な解とか、そういう考えだったのに対して、いま我々が追求しているのは、ものすごく個性的のある答えとか、状況に応じて臨機応変に対応する、ということです。これは特に人間の相手をするようなシステムには不可欠です。人間には個性があり、相手に応じてやり方、応答の仕方を変えることが必要ですし、相手の「心」を理解するということに立ち入っていく必要がある。だから心とは何か、その人の人生はどういうものであったのかとか、何を良いと思っているのか、そういうことをシステムのほうが実際に理解でき、それに合わせて行動を作れるようになっていかなければならない。そういう人間性の問題はこれまで文系の学問で扱われてきたことですが、理系の側としても将来的にこういうことが扱われなければならなくなってきている、扱っていきたいと思っている、ということです。

## 國吉先生インタビュー

2010 年 6 月 25 日 駒場 9 号館 LAP 会議室

### 身体性というトピックと教養教育

**石井**　南京大学で授業をされた感想はどうですか?

**國吉**　聴衆が日本語科の学生というのを知ったのは現地だったので、どういう人が聴きに来るのか分からなくて。普段は理系か、一般の幅広い方々を相手に話すことが多いのですが、理工系の基礎知識がない方々に対して自分の内容は適切だったか、どのへんを押せばいいのか良く分からないという感じでした。

**石井**　この南京プロジェクトは、東大の教養教育を中国に持って行こうということなので、文科系だけだと片手間になってしまうんです。現時点では日本語科が主な相手ですけれど、理系の内容も、文系の内容も、両方とも物事を考える材料として向こうに持っていく、ということはどうしても必要だと思います。

**國吉**　いや、私の授業も専門的な数式がいっぱい出てくるとかそんなでもないので、基本的な考え方を訴えかけるという意味では一般向けにしたつもりなんですけど……ただ授業で非常に基礎的なことをやるべきなのか、それとも比較的最新の研究で面白い話題を持ってくるのか、全体の設計との整合性をどういうふうに考えたらいいかってところを、あえて悩んだというか。まあ他のレクチャー見てもそれぞれ先端的な話題がいっぱい出ているな、という感じがあって、まあそれでいいのかな、と思いましたけど……。

**石井**　昨日は内野先生(舞台芸術論)にインタビューしたのですが(P.24)、内野先生の授業では、こういう質問がでたそうです。「理系の先生は身体をこういうふうに話していました。内野先生はこういうふうに話されますけど、私の身体は一つなんです、なぜ話し方や内容が違うんですか」と。同じ身体を色々な方面から考えるという方法は、学生にも響いたのではないでしょうか。

**國吉**　まあ、通じるものはあったんですかね。身体性っていうトピックは、意外に難しいトピックなので、ロボットのなかでも、先端的な研究分野で深く議論される話題で……だから(授業の)設計が柔軟で悩むというか。でも逆に全体を、文系理系を貫くテーマとしては良いテーマだと思います。私がやらせていただくものとしてはベストのテーマでした。

### 学生よ積極的に海外へ

**石井**　今回、学生を派遣したんですが、先生の回にも東大の学生が 2 名参加していました。その効果はどうでしたか? 授業内容の理解などで、日本人学生が参加しているほうが話しやすいなどはありましたか?

**國吉**　私にとっては大変心強いといいますか、話し相手がいてくれて助かったと思ってます。授業では日本人学生が質問をしてくれれば、他の人もつられて、というのはあるでしょうから、良い効果はあるでしょう。ただ、私の時は学生が 2 名だったので、人数的にちょっと少なかったかもしれないですけど……。

**石井**　参加者の学生さんに理系は少なかったんですが、中国に学生を連れていくということは、理系の学生さんにとってはどうでしょうか。どのようにメリットを持たせたら良いでしょうか。

**國吉**　良い経験、という意味で、メリットは大いにあるんじゃないでしょうか。文系理系っていうよりも、向こうの学生さんとの交流じゃないですか。それから要するに、中国の大学って実際に見てみるっていうのは、絶対に印象変わると思うので……中国の学生に会ったりとか、とにかく良い経験、効果はあると思うんですけれど。ただ、理系の学生がなのか知らないですけど、一般に海外に是非行って色々見てこようというモチベーションが最近あまり高くないんですね。それは教員の方でも少し心配しているんですけども、なんかこう、視線が内向きになっていると言いますか、自分たちは世界のトップクラスにある、別に海外行って勉強しなくていいや、なんて思ってるのかっていうのが一つと、学部学生はともかく大学院生とかは、海外にいくのはタイムロスだと考える傾向があるんですよね、それによって自分の研究が少し遅れるとか、就職活動に支障が出るとか、そういう観点で見る人が多い。

**石井**　やっぱりすごい時間との戦いや競争なのでしょうか。

**國吉**　それは……まあ確かにそういうプレッシャーは強いとは思うんですけど、それにしてもちょっとそういう考えはちょっと良くないなと思って、我々のところの大学院でも、最近外のお金をとって、大学院生が希望すれば 4 ヶ月ほど海外で修学できる制度を始めて……だからそうやって一生懸命外に目を向けさせようというふうに、先生の側はやっています。ただなかなかあまり積極的にそういうところに行こうという人が増えてないという感じがするんですね。これは良くないと思います。

### 理系における人と人との結びつき

**石井**　文系からすると、インタビューに行ったり資料を探したり、むしろ海外に出ることが当たり前なのですが。

**國吉**　そりゃそうだ。理工系では情報は論文とか、ネットワーク経由とか……と思っている人がほとんどなんですよね。

**石井**　たとえば学会などで中国の方や、海外の方とコミュニケーションするような機会はありますか?

**國吉**　もちろんありますよ。うちの研究室では、修士の学生が国際会議で発表する場合が非常に多くて、場合によっては学部の学生にも発表させることもあるので、そういう機会は比較的多いと思います。

**石井**　それだと文系よりもずっと多いですね。そういうときに、

例えば文化背景によって考え方が異なる、というようなことはありませんか?

**國吉**　社会・文化、そういうものの反映ってのは、直接はないと思います。むしろそういうところから独立な体系を作るのが、理系の建前なので。ただ、そういっても、国によって強いところや進んでいるところがあるんですよ。コミュニティがやっぱり重要で、テーマによってはすごく特別なコミュニティがあって、それは実際に会って話をしてみないと実は分かんないんですね。彼らが何を考えているのか。出来たものしかデータに出さないですから。だからそういう、特に先端的な、conceptual な、philosophical な仕事が必要なところっていうのは、実際に会って話して、しかもそれを繰り返してという、そういうかなり強い人と人との結びつきが、すごく重要なんですよ。

**石井**　ロボットの分野も特にそういうことはないですか?

**國吉**　それはあります。ロボットもコンセプト勝負なところがあるんですね。つまり必然的にこういう設計がある、というのではなく、次にどういうものがあるべきか、というそういう発想が必要なんで、そういう側面は強いですね。creation が必要ですから。

**石井**　学生がそういうコミュニティに繋がる機会は、理系だとどうですか?

**國吉**　やはり国際会議が中心でしょうね。いまちょうど本郷でワークショップをやっていたんですが、かなり closed な、tight な感じの研究会ですけれど、何日もカンヅメになるような、そういうところに手伝いとかで参加するというのは、学生にとって経験になるでしょうね。

**石井**　今回の南京集中講義は、そういうのとは違ってゆるい感じですけれども、そのような経験も生きてくるはずで、そういう意味では理系の学生をもっと入れても良かったと思います。

## 他の大学や理系を巻き込む方向へ

**國吉**　今回、理系のところとの交流も実際にあれば、良かったのかもしれないですね。まあ南京大は理系っていうとちょっと限定されてしまいますが……あとは向こうとの関係がどうかにもよりますけれど、近場でいったら上海交通大学、あそこは強いですよ、理系。あそこも交えてセットでやるみたいな感じだったら、理系も大いにね。北京だったらもちろん清華大学です。

**石井**　それは実はいま考えていまして、今後こうした試みを北京大などにも拡げていく可能性はあります。

**國吉**　これはもう一つ、関係するかもしれないことは、今週東大に来ていたスイスのチューリッヒ大学の Rolf Pfeifer という先生、身体性認知科学とよばれる分野の創始者みたいな人ですけど、その人が、去年と今年秋、上海交通大学でテレビ会議を使った国際遠隔講義をやるんです。上海からチューリッヒ経由で、世界 40 カ所に発信するということですけども、実は 2004 年に類似のことを東大でやってるんです。2004 年に COE（Center of Excellence）の准教授としてお招きして、東大本郷から AI Lectures from Tokyo というタイトルで、13 回くらいのシリーズで、テレビ会議で世界 20 カ所（数カ国）に配信するというのがありました。そういうのがあるっていうのを、ご参考までに。

**石井**　なるほど。こういうことは、理系のほうが進んでいるのかもしれないですね。ただこれは、やっぱりテレビ会議を通じてということで、実際にその国に行ってみるのとは違いますね。

**國吉**　それは別です。もちろん、なるべく臨場感を出すために Virtual Reality っぽいものを併用して、セカンドライフ（※ネットワーク内部の VR 世界）に入って各国でグループを組んで話し合いをさせるとか、そういうのも最近はあります。

## 英語か通訳か

**石井**　その場合では英語で話し合うことになりますね。

**國吉**　まあ英語でしょうね。

**石井**　今回の講義は日本語ですが、その違いというのは何か感じられましたか?

**國吉**　実は海外に行ってしゃべる時には英語のほうがやりやすい感じもするんです。気分的に英語なので。日本語だとちょっと変な感じがして、通じてるのか、みたいなのと、通訳が入るとやっぱりちょっと気になる。随時質問ができるような、やりとりのタイミングが大事なので、そこが少し慣れなかった。

**石井**　なるほど。実は東大の学生には、英語でなくて、日本語で話ができるということが非常に良かったという感想が多かったのです。第三言語でなく、どちらかの母語で話して理解しようとすることが、コミュニケーションとか理解という面で大きかったみたいなんですが。

**國吉**　そうですか。もちろん私が中国語を喋れればもっと良かったなとは思います。それと相手が日本語科だったので、日本語で話ができたというのは良かったですよ。ただ講義のやり方としては、通訳を含めて工夫の余地があったかもしれないと思います。

國吉先生の講義 2 日目には、日本語科以外の理系学生も参加していた。写真は同時通訳機器を使って講義を聞く南京大学生。

**石井**　分かりました。本日はどうもありがとうございました。

（文責：杉谷）

# コンピュータと Virtual Reality

廣瀬　通孝

2010 年 3 月 4 日（木）～5 日（金）

## 講義概要

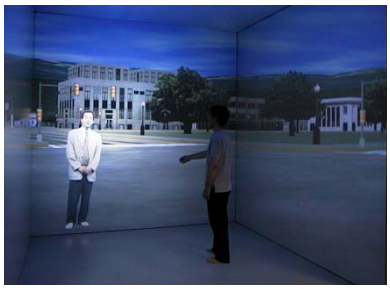
コンピュータ技術は格段の進歩をとげた。Virtual Reality（以下 VR）技術に代表される疑似体験技術は、第 2、第 3 の現実世界を創出し、我々は今やパラレル・リアリティの世界を生きている。VR 世界は TV ゲームなどでおなじみであるが、実際はもっとシリアスな存在である。本講義では VR 技術の現在に至る歴史を概観し、今後いかなる VR 世界が創出可能で、それは我々にどんな影響を与えることになるのかを考えていきたい。

## Virtual Reality と IT

VR とは、コンピュータ技術を用いて作られる映像の世界である。従って、身体そのものより、むしろ身体を取り巻く空間と身体の関係が主題となる。これまで情報技術といえば、計算とか論理の側面が重視されてきたが、コンピュータ内部にネットワーク空間が出現し、またコンピュータ技術がヴァーチャルな空間体験を作り出せるようになったため、空間・体験・身体といった概念とその関係性を再考する必要が生じている。

この変化の基礎にあるのはコンピュータの高速化である。コンピュータの計算速度は毎年 2 倍ずつ速くなっている（10 年でほぼ 1000 倍）が、これは鉄道のような通常技術ではありえない高速化である。情報技術の面白さは、計算量の変化が同時に質の変化を生むことで、1KB（キロバイト）はほぼ原稿用紙一枚分の文字に相当するが、M（メガ）は写真、G（ギガ）は動画の情報量である。だから 1GB のレポートを出せという課題に対し、K の時代のアタマの人は原稿用紙 100 万枚書くしかないが、G 時代の人は動画を一つ撮って提出すればよい。ではもうすぐ訪れる T（テラ）の時代とはどんな世界なのか。その答えは講義の最後にお伝えしたい。

## 五感と VR



五感に訴える VR 技術では、触覚がその典型だが、感覚が身体動作に応じて生じるというインタラクティヴ性が重要になる。視覚では、全面 3D 化された部屋では首や眼球を動かして動きを追うことができる。だから眼前を走り抜けていくはずの車を首を回さず見る映画は実は変なのだが、その実感はスライドでは伝えにくい。他にも視野の外部でも動きだけは感じる「周辺視」が、臨場感にとって重要であることが知られている。聴覚のディスプレイであるステレオも、ホールの音響は作り出せても、床屋が髪を切るときの背後の鋏の音のような臨場感はいまのところ再現困難である。

ディスプレイ上のマウスポインタの速度の変化からマウスを持つ手に擬似的な重みを感じるように、人間の五感がイリュージョンを持つことも、VR との関係で重要である。例えば嗅覚や味覚は、色彩によって容易に誘導される。この性質は、本来多数の化学物質が関与する嗅覚や味覚を、より簡単なディスプレイ装置で再現できる可能性を示しているだろう。

## 情報の洪水と可視化技術

「百聞は一見にしかず」というが、「百見は一体験にしかず」（立花隆）。VR も一つの情報伝達技術であって、現実には体験不可能な情報を、感覚的に伝達できる点に特色がある。金星の表面や、光が 30cm/s の世界、海水面上昇によって水没した東京などは、VR 技術があって初めて可視化できるのである。では、可視化技術は情報伝達上、どういう意義を持つのか。

日本では、一人の人間が受けとる情報量は毎年 10%ずつ増えており、今後我々は否応なく、ますます多くの情報を受けとり活用せねばならない。この情報の洪水のなかで、如何にそれを身体化するかが課題となるはずだが、VR は人間の情報処理能力を補う、メガネや補聴器のような存在といえる。（講義冒頭にプロジェクタが動かないトラブルがあったが、）もしもこの講義

が映像抜きで言葉だけだったら、と考えるとそのことが実感できよう。

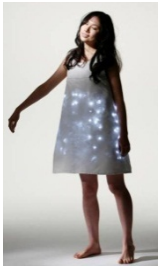
VR の強みは、言語情報だけでなく、空間や雰囲気のような「アンビエント（環境）情報」を伝え共有できる点にある。しかし全面 3D 化された部屋という「どこでもドア」でも時差は消せないわけで、寝ている相手とは会えない。つまり、VR でのコミュニケーションに影響する real な文脈は、そう単純な問題ではないのである。

## Augmented Reality と Augmented Virtuality

Virtual は日本語で「仮想」、中国語で「虚擬」と訳されるが、決して imaginary とか supposed という意味ではなく、本義は in essence （実際上それと同じ）である。

動物園のライオンがリアルか、それとも中央電視台がハイビジョンで撮影したサバンナのライオンのほうがリアルか？ 実は、VR 技術に本当のリアル、本当のヴァーチャルというのは存在せず、その中間領域（Mixed Reality、複合現実感）こそが実態である。そのうち特に、リアルな世界をヴァーチャルな情報で一部修飾したものを Augmented Reality（拡張現実）、ヴァーチャルな世界にリアルな情報を一部組み込んだものを Augmented Virtuality（拡張ヴァーチャリティ）という。

## モバイルとウェアラブル



Augmented Reality 技術は、現実世界を修飾する VR 技術である。従って普通の VR 技術と異なり、広大な実空間の内部を動きまわれる必要がある。そのため、モバイル（携帯可能）・ウェアラブル（着用可能）といった概念と親和性がある。

冒頭に述べたような計算速度の高速化は、計算機の小型化に繋がる。モバイル・ウェアラブルとは、コンピュータのある場所に人間が行くのではなく、人にコンピュータがくっついて来ることだが、それによって、いま情報科学は天動説から地動説へのコペルニクス的転回を迎えている。例えば、常時 ON、hands free、「ながら」などの新しいコンセプトが生まれ、コンピュータ自体も institutional から personal の段階を経て、メガネのように個々人にチューニングされた intimate な機械になると予想されている。

またモバイルとは逆に、実空間に直接 VR 技術を組み込む方向も考えられ、大画面ディスプレイと一体化したビルや、羽田空港デジタル・パブリック・アート展「空気の港」などの例がある。

## ライフログと T（テラ）の時代

モバイル・ウェアラブルは実空間と VR 技術の関係であるが、逆にヴァーチャル空間の中にリアルな情報を組み込む Augmented Virtuality 技術は、本質的に記録性、さらに視覚化によって時間軸を遡行する体験可能性をその特徴とする。例えば閉館になる予定の博物館を写真に撮り、3D 空間として再構成するなど、この技術では従来残す価値が低いと思われていた「B 級」なモノも、体験可能な情報として残しておける。

特に注目されるのが、目覚めて活動している間の音声と映像を全て記録し続ける「ライフログ」という考え方である。このログ（履歴）を使えば、その人の過去はある程度追体験可能な形に再現でき、当時は気付かなかった新たな文脈を引き出すことも可能となる。ところで、実は一人の人間の生涯のライフログは、テレビ会議品質だとわずか 10T の情報量に相当するにすぎない。つまり T の時代とは、同じ時間をかけさえすれば他者の過去を追体験することが可能な時代なのだとも言えるだろう。

## 機械と人間

20 世紀は、人間よりも機械が中心の世紀であった。21 世紀には、本来異質な存在である人間と機械とを、どう調和させていくかが課題となるだろう。そこで一つは國吉先生のように、機械を人間的感性に近付けていく「代替型機械」の方向がある。もう一つは、逆に人間が機械を取り込んで身体を拡張する「拡張型機械」の方向である。これはメガネや人工臓器などに限らずモバイルな機械一般がそうであり、また VR や可視化技術は機械による感覚器官の拡張、ライフログは記憶の拡張とも考えられる。では人間と機械の間の違和感は、最終的に無くせるのだろうか。これは難しい問題である。皆さんにも考えていただきたい。（文責：杉谷）

BBS（交流論壇）より

◆ 南京大学学生

廣瀬先生的讲座内容我们感到非常有趣，但也有些小小的疑问。作为文科的学生，我本人更想知道的是这些科学发明背后的一些人文的事情，例如，衣服内植入小型计算机的发明的确很在某些方面会有帮助，但其负面影响是不是日本的研究学者们已经考虑在内了呢，首先是这种技术会不会对人体产生危害（电脑辐射之类）呢，其次，这种技术万一被一些不法人员掌握的话，会不会引发一些犯罪活动呢（跟踪，偷窥隐私等），我想在研究发明这些可能引发的问題是不是也应该考虑一下呢

廣瀬先生の講座の内容は私たちにはたいへん興味深かったです。ただ、いくつか小さな疑問があります。私は文科系の学生として、科学的発明の背後にある人文的な事情についてもっと知りたいと思います。例えば、衣服のなかに小型のコンピュータを織り込む技術は、たしかにある方面において大きな助けになるでしょう。しかし、そのマイナスの面については日本の学者の方々は考慮されているのでしょうか。まず、このような技術が人体に悪影響を及ぼさないかという点（例えばパソコンの輻射）、次に、このような技術が万一法を犯す人間に握られた場合、何らかの犯罪活動を引き起こしはしないかという点（ストーキング、プライバシー侵害など）。こうした研究、発明が引き起こす問題についても考慮すべきであるのではないでしょうか。

◇ 廣瀬先生

技術を考えるとき、アクセルとブレーキは常に一緒に考えねばなりません。高速列車の最高速度は実はブレーキ性能で決まっています。しかし、ブレーキだけでは列車は決して走りません。

VR 学会やゲーム学会など、比較的新しい学会では人文系と技術系が一緒に研究するようになりました。人材的にも、技術のわかる心理学者、法律のわかる技術者など、色々な組み合わせが生まれています。（古い学会まですべて変わるのには時間がかかるかもしれませんが。）細かいところでは、電磁輻射についてはガイドラインが作られようとしています。3D については予備的なものができました。プライバシーについてはまだまだです。（法律が追いついていません。）

◆ 南京大学学生

非常感谢这次两位先生的精彩讲演，对接下来要来南大的老师们也很期待。广濑老师的讲演，由于时间仓促，没来得及提问。其实关于 Virtual Reality，其神奇性已有所耳闻，这次有机会学到了更新的知识。我比较关心的是，VR 的弊端已经显现。譬如说，沉溺于 VR，而与现实脱离的情况，尤其是学生们在以网络游戏为代表 VR 中迷失自我的情况时常可见。不知研究 VR 的广濑老师对 VR 与 Reality 之间的矛盾作如何思考，这一问题日本方面是否在技术上有所考虑？谢谢！

今回の二人の先生方の素晴らしい講演に感謝いたします。今後いらっしゃる先生方にもたいへん期待しています。廣瀬先生の講演に関してですが、質問する時間がありませんでした。実は、ヴァーチャル・リアリティ（VR）の不思議さについて耳にしたことはありましたが、今回はもっと新しい知識を学ぶことができました。私が関心があるのは、次のような点です。つまり、VR の問題点というのは既に現れていて、例えば VR の世界に溺れてしまって、現実との関わりを失う、とりわけ学生がネット上のゲームに代表される VR の世界のなかで自己を見失ってしまうといった状況は珍しくありません。VR 研究者の廣瀬先生は、この VR と現実世界の間の衝突という問題についてどのようにお考えでしょうか。日本ではこのような問題に対して何か技術的な考慮がなされていますか？

◇ 廣瀬先生

日本では、その手の議論は一段落したところだと思います。2000 年を越えたあたりで、大体の人（特に若い世代）が電子的メディア世界を体験し、その限界や問題を理解したのではないでしょうか。その結果、過剰な期待もしないし、かといって全面否定しないという、俯瞰的な目を持つようになってきたといえます。その昔、TV がそうでした。一億総白痴化、TV 亡国論などを唱える人もいたぐらいです。もちろん現在はもっとこなれた形で TV に接しています。

現在、リアルとバーチャルは対立的ではなく、共存すると考えられています。何が何でもバーチャルにしようというのではなく、リアルでできないところでバーチャルを使いこなすべきでしょう。リアルの隣にあってもなおかつ存在意義を失わないバーチャルとは何か、こそが今日的な技術課題です。

◆ 南京大学学生

广濑老师的讲座非常有意思。特别是某个学生装上 GPS 记录下自己一年之内的行程的分析，非常有趣。

廣瀬先生の講義はとても興味深かったです。特に、一人の学生に GPS を装着して彼の 1 年間の行動を記録した例の分析が面白かった。

## 廣瀬先生インタビュー　2010 年 6 月 4 日　本郷キャンパス工学部 2 号館　廣瀬研究室

### 通訳とのやりとりが楽しい

**石井**　南京集中講義、学生や全体の印象はどうでしたか?

**廣瀬**　今回はね、学生が真面目ですね。それから……理系は少なかった?　文系なのか理系なのか良く分かんなかったってのがありますね。あの、いきなり反省点はあれだけど。

**石井**　理系の先生の講義のほうが実は反応が良かったんです。

**廣瀬**　そりゃ良かった。良かったといえば通訳ですね。僕のときには通訳に横に来てもらって、変わったやり方でやったんだけど、逐語通訳でやったから伝えられる量は半分になる。なるんだけど、通訳と個人的に喋ってるみたいな不思議なインタラクティヴになってね。通訳の子がすごい真面目で、アニメネタを使うとこの子だけ分からない。「この技術はどこでもドアみたいなもんで」って言ったら、聴いてる学生は日本語で通じてたのに、通訳の彼女だけ分かんないとか、そのあたりが面白かたね。例えば NHK みたいなきれいな番組より、下手ウマな自主製作映画のほうが記憶に残るみたいな。授業もそんなもんですから。あと行き帰りの車のなかで通訳の子と話す場があって良かったけどね、ああいうインタラクティヴな場所がもうちょいあっても良かったかな。あの人数だと難しいかもしれないけどね。

**石井**　学生とのインタラクティヴなやりとりは、文系ですと、盲聾体験(福島先生)とか議論(清水先生)などの場を設けました。理系だと実験などになりますか?

**廣瀬**　その場合のインタラクティヴってそこまで真面目でなくても良いんじゃない?シリアスな話題でなくても良くって、上海の地価が東京より高いとか、結婚するときに家を買えないともうダメだとか話したけど。任天堂の Wii で一緒に遊ぶのだって良いと思う。まあ講義は講義でやるとして。理系でやるとなると、例えば東京という都市を写真から 3 D のモデル化してっていう実験・実習みたいな話になって、そうなると今のような枠では難しくて、予算もかかる。まあ、そこまでやりたい学生さんは、東大まで留学に来てください。

### 日本なら秋葉ツアー?

**石井**　今年秋に南京大の学生を東京に呼ぶ計画もあります。

**廣瀬**　それだったら、例えば「アキバ・ツアー」なんてどう?まあ趣味によるんだけどね。オタクは何人いますかみたいな。一つのカルチャーがあって、そのメッカなわけだし。東大主催っていうと絶対怒られそうだけど。

**石井**　彼らの固定観念を壊すほうがいいですよね。

**廣瀬**　これはあなたのほうがご専門でしょうけど、比較文化なんていう分野では、比較する対象があるかないかって問題があるでしょう。今回は孫文のお墓とか真面目な場所にしか連れて行ってくれなかったけど。本当だったら、例えば南京にアキバに相当する場所はあるのか?みたいな。あと、あれは配慮してくれたのかどうか知らないけど、新幹線や地下鉄に乗せてくれたのは良かったですよ。こんな新幹線走るんだみたいな。まず防音壁ないでしょ全く。パンタグラフの風切りもないし。すっごい安いですよあれは。こちらから学生が行った時もね、真面目にあれするとやっぱり「国家のちゃんとした文化を」みたいになっちゃう。学生の目線でいくと、南京にゲーセンはあるのかみたいな、そういうのは難しいかな?　knowledge 自体は本を読めば分かるわけだし、重要なのはもうちょっとその後ろっ側にある文化とか、そういうことやってる先生の人間性みたいな話とか。

### 歴史学のデッドロックとオーラルヒストリー

**石井**　逆に南京の学生が来たときにも、何か刺激できるように、東大生の日常を見せたいというのはありますね。それからもう一つ考えているのは、南京集中講義とは別に、例えばオーラルヒストリーのテーマ講義をやって、南京に放映するということも考えています。

**廣瀬**　へぇ〜オーラルヒストリー面白いよね。僕ね、御厨貴先生(オーラルヒストリー、政治史)と共同研究をやっています。御厨先生と僕の接点って面白いでしょう。今ね、先端研コンテンツ拠点で僕らはミュージアム研究をしていて、ミュージアムって基本的にその、フォーマルな歴史と、その後ろ側にあるインフォーマルな歴史ってあるじゃないですか。彼にしてみるとこの背後の物語ってのが非常に重要で、その物語をデジタルメディアで作ってみようとか。『三丁目の夕陽』みたいなね。それから、彼はウェアラブル・コンピュータで体験をまるごと記録する「ライフログ」なんていう話にも興味があってね。

**石井**　東大の学生にもオーラルヒストリー体験をさせてみたいと思っていて、テーマ講義を受けた上で、中国に行ってオーラルヒストリーをさせる計画も考えています。

**廣瀬**　20 世紀は、既に基本的な main の情報交換が確立された時代なんですよ、あとは二次残差みたいなのが重要になってくる。二次残差で何がどう変わるのかっていう。非線形な現象の場合って二次残差が非常に本質的な役割を果たしたりするじゃないですか。交流なんかもそうだと思うんですよ。キレイごとの交流ってもう出来ることが分かっているし。南京はすごく敏感な場所でしょう。その意味でも、オーラルヒストリーは重要ですよ。オーラルヒストリーと聞いて安心したんですが、いわゆる「憲政記念館」に入っちゃうみたいなフォーマルヒストリーで語

ってしまうと、デッドロックしてしまう。

**石井**　そうですね。既に政治化されてしまっているという理由もあって、うまく交流できなくなってしまうんですよね。

**廣瀬**　彼女らは、面白いのは、対日でもないんだね。そうそう単純でもないんだ、「北京との関係が微妙です」とか言っていました。色々そういう問題もありそうだな、という感じも。

**石井**　メインストリームの歴史から外れた場所なので、そういう意味でも、話し合えれば面白いでしょうね。

**廣瀬**　それだったら面白いのは、ヒロシマのオーラルヒストリーをしている方。それも大上段の話ではなくて、平和公園の辺りが昔、花柳街だったんです。そこが焼け野原になったのを、全部埋めて平和公園にしちゃったんです。でもそこに住んでいた人たちもいるわけで、そこに複雑な思いもあって。それを全部 CG で復元すると。その手法がオーラルヒストリー。たまたま学童疎開で生き残ったおじいちゃんたちに話を聞いてね。その方の家も、原爆ドームの隣に家があってお母さんがまだそこに住んでいるような方で。そういうコンテンツってのはやっぱり、原爆資料館に入ってる直接的なコンテンツとは違うけど、けっこうあるんですよ。そういうことを南京でやれたら面白いでしょうね。そこに政治的な話が入ってきてしまうと、ちょっと重い話になっちゃうけど。オーラルヒストリーってね、すごく良いですよ。文科省のデジタルミュージアム構想とかライフログとか、いまの技術では、どうでもいいと思われていたものも全部残せる。そういうことが、後から思い出すと宝になる、ということがあるわけですよ。このインタビューもそうですけど。

## 文理の枠を超える必要

**石井**　理系学生にとって南京プログラムはどうでしょうか。廣瀬先生や國吉先生は、基盤技術の先の新たなパラダイムを追求されていますが、中国はまだキャッチアップ段階では。

**廣瀬**　中国が遅れているという感じはないですね。ロボットのようなハードはキャッチアップが大変ですけど、IT は速いですからね。もうじき CG の大きな学会は中国でやるようになりますよ。大学レベルでは志が高い人だとかみ合うかも知れない。それに Microsoft China なんて日本に研究所を置かなかったんだよね。完全に Japan passing でしょう。北京のほうが日本より能力高いって言われてますよ。携帯電話なんかを見ても、中国のほうが体制が新しい。情報系の学生は中国に行く意味は大きいと思いますよ。それから、いま情報系の学術俯瞰講義をやっていて思うんですが、これからは文系でも理系でもないみたいな人間がむしろ面白いのかもしれない。

**石井**　理系の学生、特に大学院生が南京集中講義に参加してくれれば、大変面白いのではと思います。

**廣瀬**　いまナナメの関係が非常に難しいと言われていますから、そういう意味で良いのかもしれませんけどね。ただ理系の場合、こう（内向きに）なりがちだから。理系の欠点の一つは、自分で座っててもできちゃうんだよね。だから、「あなたにとってプラスになるんですよ」と提示できるか。ちょっと理系は忙しすぎるしね。つらつら考えるに、文系は机がもらえないでしょう、浮き草だけど、逆に場所に依存せずに自由に出られる面もある。理系は研究室で自分の机を持ってて、自分の実験装置がないとできないから、装置産業化して根が張っちゃうんだよね。どうしてもそっちが priority としては高くなっちゃう。だからどう目的を与えて一歩を踏み出させるか。ウェアラブル・コンピュータの実証実験、とかね。

## 日本語で国際交流できることの意義

**石井**　そこまで目的を与えないと難しいですか?

**廣瀬**　理系的オーラルヒストリーとか、なにか特殊解を考えられないかな。総じて言えば、国際交流にどんな意味を込めるかでしょうね。今回は向こうが日本語科で、language barrier が少なかったし、お互いにいろいろ感じたでしょうね。

**石井**　相手の日本語力に圧倒されたという人もいました。英語でないことのメリットはきっとありますね。

**廣瀬**　そうそう、これは絶対何らかの記録に残してください。そのことが重要だということを言う人があまりにも少ないので。学会では英語が中間言語の役割を果していてっていうのは確かに一理あるけど、全く無批判にというのはおかしい。日中韓はアメリカ以上に CG 分野で主導的な役割を果たしている、その三国の研究者が英語でやりとりするっていうのは、やっぱり何か変だと。それで一度、AsiaGraph という学会を全部母国語でやったらめちゃくちゃになりました。ところが、実はそもそも誰も話を聞いてなかった。CG だから。ただ、英語という中間言語に落としてしまうと分からない部分がどうしても出てくるわけです。昔は欧米モデルしかなかったわけだけど、いまアジアという場における国際交流というのは、もう少し違った形もあるのではないかと。今回は南京の側が日本語を使ってくれたので非常に楽でしたが、ポイントポイントでどちらかに合わせるというのは一つのやり方でしょう。

**石井**　それに、南京側の学生も日本語を話したい、日本語に触れたいわけです。

**廣瀬**　そのことは、日本は本当にもっと大事にしないといけない。だけどその認識もないんだよね。その点東京大学ももっと頑張らないといけないですね。

**石井**　そうですね。今日は大変興味深い話をありがとうございました。

（文責：杉谷）

# パフォーマンスにおける身体

## ――1960 年代以降のアメリカ演劇を事例として

内野　儀

2010 年 3 月 9 日（火）～10 日（水）

### 講義概要

アメリカのいわゆる60 年代演劇は「身体の演劇」と呼ばれてはいるが、そこでいう「身体」とは何を指していたのか？　そしてそれは一体、何を成そうとしていたのか？　さらに、その後に急速に進行したポストモダン的旋回後、その「身体」をアメリカのパフォーマンスはどのように扱おうとしているのか？　この講義では、上記のような問いを立てながら、アメリカの 60 年代以降の演劇とパフォーマンス・アートという演劇の隣接領域にあるジャンルの理論的展開を比較検討し、適宜ヴィデオ映像を参照しつつ、アメリカのパフォーマンス的現象における身体の問題を考えてゆきたい。

### 68 年型演劇における肉体（身体）

リヴィング・シアターは 1951 年に創設された。初期の代表作『ザ・コネクション』（1959）は、現実と虚構の境界の突破を目指した上演であった。その後即興性や観客参加を重視する中で、その方法的理論的問題の最終的な形態として、『パラダイス・ナウ』（1968）が上演される。彼らの演劇的想像力はアナーキストの想像力であり、資本主義と人種主義の問題に言及しつつ、新たな共同体創出の夢を演じるという意味で、きわめて政治的なプロジェクトとしてもあった。ヴェトナム参戦から 1968 年の北爆停止に至る時代状況の中、劇場の外にある「政治」とどのような緊張関係を持ちながら、演劇活動の立場性を構築していけるのかという問いが、彼らをあそこまでアナーキーな行動へと駆り立てたとも言える。

オープン・シアターは 1963 年に創設され、主宰のジョーゼフ・チェイキンは、元リヴィング・シアターのメンバーである。「演劇の革命」と「革命の演劇」の間に揺れ動いていたリヴィング・シアターに対し、チェイキンは「演劇の革命」により強い関心を抱くことになり、演技や俳優の身体の問題に関心を集中させていた。オープン・シアターの明確な仮想敵は、ブロードウェイ的な俳優の透明性を重視する演劇の生産システムであり、チェイキンの関心は、俳優の現前性、不透明性という問題にあった。チェイキンの政治性は、ブロードウェイ的美学に対抗するような美学をたちあげることと共に、その美学によって同時代的コメンタリーとしての作品を立ち上げるという方向性があった。

パフォーマンス・グループはリチャード・シェクナーが 1967 年に創設した集団で、リヴィング・シアター的60 年代の想像力と、その後のアメリカにおける前衛演劇の転換点に位置している。最初期の『ディオニソス 69』（1968）は、「劇中の人物よりもむしろ役者の存在に重きが置かれて」（シャンク）いた。シェクナーは俳優の身体と演技術にも興味を持っていた。政治性ということでいえば、彼はチェイキンと比較的近い立場にいる。

### ヴェトナム戦争の諸問題

アメリカの演劇は、一方では国内の公民権運動、他方ではヴェトナムへのかかわりという内外の両方の文脈のなかで、自らの演劇を構想することを迫られていた。ビグスビーはヴェトナム戦争と演劇という問題について、「個人と国家の〈自己〉に対する懐疑」がアメリカ人一人一人のレベルで起こり、それにともなって、アメリカ演劇という固有のジャンルにおいては、「パフォーマンスの構造的整合性に対する疑問が噴出し」、「その結果、高度に自意識過剰なドラマが生み出され、そこでは演劇のあらゆる局面が問題視されることになった」と言う。60 年代演劇の旗手たちは演劇的表現の「根拠」を「自己」に求めて

いたが、ヴェトナム戦争を通過すると、その「自己」すら懐疑の対象になってしまう。そこではもはや、リヴィング・シアター的に、反制度・脱近代＝脱アメリカ化という方向で演劇を思考することは不可能になる。

## 「イメージの演劇」へ

マランカによると、パフォーマンスが次第に重要視されることになった結果、70 年代の新しい演劇は戯曲テクストを舞台の上で再現するものではなくなった。フォアマン、ウィルソン、ブルーアの「イメージの演劇」（マランカ）作品では、対話が無くなりイメージがそれに代わる。ウィルソンの舞台では座して見守るべき物語は無く、観客の身体を束縛しない。舞台上の動作もコードに依るものではなく、動作の解釈は観客に委ねられる。フォアマンの作品では、セリフは重なってクライマックスを迎えることなく、意識的に切断されている。「身体」はウィルソンの頭の中のヴィジョンを実現するための道具となった。脳内にあるものをそのまま表現するという手法は、それまでは小説や絵画において見られたことである。物語を表現するというよりは、抽象画に近い舞台であった。

## フェミニスト・パフォーマンスにおける「身体」

ポスト・モダンダンスは、日常的な所作を含めたあらゆる動きはダンスであると考え、トリシャ・ブラウンによる『アキュムレーション』などの、パフォーマーの感情を表現するものではない、身体の動きだけで作品を成立させようとする作品が作られた。

フィンリーの代表作といえる『欲望の恒常的状態』(1987)の中では、比較的直線的なヤッピー文化批判がなされ、何も変わらないという焦燥感が語られていく。問題となる「身体」については、フィンリーは裸になり、卵黄などを身体に塗って語りを続け、そうすることによって始めて身体が確認できるというパフォーマンスを行った。ビリンジャーは、このような初期フェミニスト・パフォーマンスを経て、70 年代から 80 年代に入り、身体それ自体や身体言語の記号的操作はもはや信じられなくなったとする。

ジョン・ジェスランの作品は映画的演劇とされ、ヴィデオの映像を劇場に持ち込んだ。代表作『深い眠り』(1986)においては、「あちら側」（映像の世界）と「こちら側」（「現実」の世界）の二つの世界を描く。このような映像によって構築されるメディアと現実の相互侵犯性というものは、いまや、ほとんど当たり前とも言え、映像と現実という二元論は成り立たない。ビリンジャーはこれを「文化的リアリズム」と称した。80 年代以降のメディア化した社会では、アイデンティティは脱身体化している。その上でビリンジャーは、映像と現実というものが鏡像的に存在する中で、身体もその共鳴の中に吸収されてしまったとする。ジェスランの『雪』(2000)という作品では、観客の四方をスクリーンで囲み、俳優の気配はするが実際には映像でしか俳優を見られないという舞台を作り、現代の身体のありようを表現した。

## 身体の〈消滅〉と〈帰還〉――マルチメディア的アメリカ

ヴィデオの普及は舞台芸術にも大きな変化をもたらした。ヴィデオ・テクノロジーは、演劇の反復不可能性や美術の時間超越性を乗り越えようとするジャンル横断的試みの中で注目された。美術館における作品と観者の時間を超越した受容のあり方を問い直すために、「ライヴ」パフォーマンスとの連携が試みられた。一方、時間だけでなく空間性が問題化される流れもあり、ジョーン・ジョナスの『垂直の転がり』(1972)のように、相互参照的なヴィデオ・インスタレーションも登場した。観者であった美術鑑賞者は、いまや演劇の観客的になり、作品空間に取り込まれてしまう。

1960 年代演劇の流れをくむウースター・グループによる『ハムレット』は、『ハムレット』を題材とする映画を参照しつつ、ウースター・グループが『ハムレット』の舞台を作っていくプロセスそのものが上演されるというスタイルである。

ジョン・ジェスランによる『ファイアー・フォール』(2009)は、上演中常にインターネットとつながっており、関連サイトにメッセージが届くたびにパフォーマンスは中断される。身体そのもののありかがインターネット上ではわからないことを暗示しつつも、俳優は身体と共にそこにある。

ビルダーズ・アソシエーションによる『スーパーヴィジョン』はインターネット時代に起きている事象を表現しており、『流動都市』では家族がネットを通じてお互いに連絡を絶やさないようにするという物語が語られる。ビルダーズ・アソシエーションは、私という存在がどこにでも同時にありうるという現代の状況を肯定しようとしている。しかしそれは一方で、多重に分裂した自己の肯定でもあるだろう。

（文責：赤木）

BBS（交流論壇）より

◆ リアルの世界とは　南京大学学生　2010/03/10 22:06:40

まずは内野先生に感謝の気持ちをみんなの代表として伝えたいのです。今度のスケジュールはあんまりにもぎりぎりで、本当にお疲れ様でした。どうもありがとうございました。

それからは、私自身がこの二日間の講義を聞いて、聞き取れた内容の中で、ちょっとわからないところがあるのです。それはまずリアルのことについてですが、実は午後も直接に先生に聞いてみて、いろいろ教えていただきましたが。やはり物理学でのリアルと演劇の中のリアルとは違っています。前の広瀬先生の話によりますと、カメラやビデオで撮ったのはリアルの世界ではないと私がそういうふうに聞き取れましたが、やはり物理学では眼で見た世界、あるいはありのままの世界をリアルとするのではないかと思っています。でも演劇では表ではなく、心の世界はリアルだと思い、ちょっとみにくい顔つきや身体でも、人間の心の世界を演じ出せば、それはリアルで、そして芸術ともいえるのではないかと思います。以上はただ私自身の理解ですが、正しいかどうかはちょっとわからないけど

◇ Re:リアルの世界とは　内野先生　2010/03/11 21:49:25

「リアル」って、むずかしいですよね？ 日本語と中国語でちがうだろうし、英語でもちがうと思います。時代によってもちがうし、極端なことをいえば、ひとりひとりでちがうかもしれませんね。

日本では 90 年代以降「リアル」という言葉がはやったのですが（舞台芸術だけかもしれませんが）、わたしのそこでいわれる「リアル」がよくわかりませんでした。「自分の目で見えるものがリアル」というのがまあ普通の考え方でしょうが、そこでもまた、実際に見ているつもりで見てなかったりするということもありますよね、経験的には。錯覚とか誤認ということがよく言われます。

物理学のリアルと演劇あるいは芸術学におけるリアルが異なるのは当然で、一つの正解があるわけではないと思います。というか、芸術学的には正解はないといったほうが正しいかもしれません。書き込んだ学生の方がおっしゃるような「心の世界がリアル」というのも、長い間共有されてきた――どこでだれが、ということは厳密に定義しなければならないにせよ――考え方でしょう。実際多くの芸術形式は、演じる人の心の中や感情といったものを問題にしてきた歴史があります。しかし、芸術諸分野においても、そういった「心の世界のリアル」が疑われているように思います。そうでないと、ポストモダンダンスやハプニングといった演じる人の心や感情を問題にしない、あるいは中心にしない芸術形式が出てこない。あるいは、出てきても、広く認知されなかったのではないかと考えられます。ただし、演じる人の心＝「内面」が想定されておらず、そこで純粋に物理的な身体の動きが提示されるだけのポストモダンダンスであっても、見る人の心に何かが起こるということはあるでしょうし、実際に起きるでしょう。

このことはいったい何を意味するか？ 考えてみるに値する問題ですね。

◇ Re2:リアルの世界とは　南京大学学生　2010/03/14 21:33:05

返事してくださって本当にありがとうございます。先生の話を読んでたいへん勉強になりました。実は、この二三日、先生が教えてくださった話のもう一つもちょっと考えてみましたが。それは、緊張なら顔で緊張を表すとのような話です。でも、現代社会の人間はみんなきれいな顔つきで心を隠すのではないかと私はそう感じています。たとえ緊張でも緊張していないふり、気になっても平気なふりを、どうしてもみんな頑張っていますね。でも、今、中国でも、日本でもインターネットでとても人気のある一人のホームレスの男の子が、彼は精神上にちょっと病気があるようだが、私の眼で見れば、彼は顔で心を表す人間だと思います。喜ぶときは笑い、こわくてつらい時は涙を流し、時々変な表情も見られるが、たぶんそれはそうしたことのない我々はとても理解できない心ではないか。だとすれば、人間の本来の飾りのない様子は何だとわからなくなりました。

◆ アメリカもだらだらですか？　南京大学学生　2010/03/10 22:34:50

午後は一人のアメリカの先生に出会いました。あの先生の話によりますと、ニューヨークでは生活のリズムはとても早くて、何をしても時間だ！時間だ！とかなり落ち着いていない生活だということです。昨日内野先生がいくつのアメリカの演劇を見せてくださいましたが、それはとてもだらだら生活でしたね。だといえば、アメリカでは心を落ち着いてその様な演劇を見ている人もいます

ね、でも、リズムの早い世界でそのようなだらだらした演劇を見るのはいくらいるのですか。確かに劇場で心が落ち着けても、いったん劇場を出たら、また周りのように落ち着かなくなるのではないか

◇ Re:アメリカもだらだらですか? 内野先生 2010/03/11 21:35:44

劇場というところは、本来は時間を圧縮して劇的な時間を経験する場所だったのに、書き込んだ方がおっしゃるように、いつからかはわからないが、時間を弛緩させるようなパフォーマンスが出てきたという見方もたしかにあると思います。たしかにんなふうに、忙しくてせわしない現代社会からの「逃避」じゃないかという考え方もあるでしょうけど――劇場の外に出れば、結局、落ち着かないだけじゃないか――その場合、劇場の「中」と「外」は異なるスペースだという前提があるように思います。しかし、家で、あるいは寮でひとりでいるときのスペースとそこで過ぎていく時間はせわしない、あるいはせわしないだけでしょうか?そのように考えると、「時間が弛緩すること」の別の面が見えてくるかもしれませんね。

「いくらいるのですか?」というのはすばらしい問いだと思います。というのも、現実の時間を圧縮したり、ふつうの人にはできない早さややり方で身体を動かすと、ふつうは「お金を払ってもいい」と思うわけですよね?それはすなわち、芸術が消費財と見なされるということですよね?少なくともアメリカの 1970 年以降のパフォーマンスをやった人たちは、そういう「人にできないことをする」ことで生計を立てるといった考え方から離れようとしたことは事実です。だから「だらだらした」というとあまりに短絡的ですし、そういう考え方は理想に過ぎないともいえますが、たとえば、ハプニングやポストモダンダンスの初期に、ただビルの建物を歩いて降りるというようなことをやったアーティストは(それはそれで危険ですが)、お金=入場料をもらって何かを見せなければならないとは思っておらず、自分が表現したいことを表現するというつもりだったと思います。その点も、いかにもアメリカ的なのかもしれません。

◇ Re2:アメリカもだらだらですか? 南京大学学生 2010/03/14 21:45:30

いろいろ教えてくださって本当にどうもありがとうございました。もし先生がおしゃったようにアメリカはアメリカ的なら、日本も日本的、中国は中国的になりましたね。では中国的な演劇はどんなものなのか、専門家の先生のご意見をお伺いしたいのですが

◇ Re3:アメリカもだらだらですか? 東京大学学生 2010/03/15 14:00:14

東京大学の学生です。内野先生の授業に参加できず残念です……

中国、日本、アメリカ、それぞれに文化的な違いもあるし、伝統の違いもあるので、やはりそれぞれに違う演劇を持つものかもしれません。その違いもどのようなものか、考える価値がありそうですね。個人的な意見ですが、日本の伝統は静、セリフ少ない、に対して中国の伝統は動、セリフ多い、という印象があります。

他方、日本も中国も、アメリカも、同時代的に近代ないしポスト近代という時代を体験しているとも言えるわけで、この点において各国のモダン演劇が共通の問題を抱えていないか、というのが私はむしろ気になります。他の書き込みにもありましたが、自分の感情をあまり表情に出さずに隠す、というのは、ある意味で都会的、近代的な人づきあいの特徴ではないかと思いますが、第一にこのような現象はどの程度各国で共通なのか。また第二に、このような感情表現の近代的特徴が、演劇という「表現」においてどのような問題ないし演技として表れているのでしょうか。内野先生が例に挙げたような、人の「内心世界」を描かないポストモダン演劇というのも、このような「モダン(近代)」を通過して後、その現象を客観化する立ち位置から生まれた表現なのでしょうか。

## 内野先生インタビュー　2010 年 6 月 24 日　駒場キャンパス 9 号館 LAP 会議室

### 設備の問題

**石井**　南京集中講義ではお世話になりました。南京でのご感想など、特に感じられたことはありますでしょうか。

**内野**　今年はまず、新しい校舎そのものは良いんだけど、パソコンがプロジェクタになっているにも関わらず音声がつながらなくて。結局全部マイクをパソコンのスピーカ部分に当てて音を拾っていました。あの広いきれいな教室で、画面は大きいのに音は出ないというのがちょっと学生に悪かったな、と。

### アジアのテーマ／欧米のテーマ

**内野**　去年は日本の話をしたんですよ。で今年はアメリカの 1960 年代以降の演劇の話をしたんだけど、今年の方が食いつきは良かったですね。それだけ日本の現代演劇はわかりにくいということかなとは思います。

**石井**　新しすぎるということですか?

**内野**　つまり、演劇というもののイメージが様々に異なるわけですよね。そうすると、日本の演劇というのは非常に類推しにくいという感じがあったみたいです。それに対してアメリカの演劇は、例えば裸になって暴れるとか、そういう意味において割とわかりやすい。しかも理論的にも、「イメージの演劇」という題目がついていることで、イメージを見れば良いとわかる。西洋芸術に興味がある人などにとっては入りやすい授業だったのかもしれないですね。BBS でも割とすぐに反応がありましたよね。

**石井**　アメリカの方が食いつきが良いというのは、アメリカのイメージがあるのか、それとも中国の人が一般に親しんでいる演劇がちょっとそれに近いのか、どういうことなのでしょう。

**内野**　中国ではハリウッドの映画とかテレビドラマなどは、日本以上にかなり見られているということが関係しているのかもしれない。アメリカのテレビ文化って、日本ほど裸とか暴力に関して寛容じゃなく、レーティングが厳しいので、中国でやりやすいのかなと。そういうことが関係しているのか、西洋人の方が、中国人にとっては日本人より他者だから対象化しやすい。日本人に関しては、同じアジア人なのに何やっているのかわからないとすぐ思っちゃう。今年はそんな印象でした。

**石井**　テーマをアジア的なものにするのか、それとも欧米的なものにするのかという問題があるのです。自分たちのアジアの問題を考えたいという学生もいれば、ヨーロッパのことは知らないことが多いからついていけませんでしたという学生も多くて、どちらが良いのかなというのはいつも考えるところなのですけれど……。

**内野**　テーマと切り口の問題ですよね。つまり、清水先生のクィアといった問題になると、対象としてはアジアでも良いわけだけど、切り口のレベルで言うと、学問は近代においては西洋中心に発達したんだから、理論的な水準や分析の方法としては西洋のものを採用せざるを得ない。何を対象とするかというのはまた別の問題なのですが、ただ、理論とアプリケーションという風に簡単には割り切れないところもある。例えばクィアが何故出てくるかというと、欧米圏におけるゲイポリティクスの歴史的な状況から必然的に出てきた理論じゃないですか。それを共有していないところからは、クィア理論の必然性はわかりにくい。だからアジアのことを勉強したいというのも、なかなか難しいところだよね。

**石井**　難しいところですよね。アジア的なものと欧米的なもの、両方あってもいいかなとは思っているんですけれども。

**内野**　今のところは社会科学的なものがあまり行っていないんだよね。日本の政治とか、経済とか、そういう需要があるのかどうかちょっとわからないですね。日本語科の子たちは、今年は就職が大変だって言ってたけど、去年まではある程度地元の企業に就職できたみたいで、教養を求めているのか、もうちょっと実践的な、これから一般企業で働いていくための基礎知識が欲しいのかというのは、またその相手によるわけだ。

**石井**　そうですね、相手にもよりますし、一応こちらは教養教育というものを考えていて、向こうに対してどういう教養教育を持っていけるかなということですので。

### 具体性のあるテーマの長所

**内野**　二つ目にはやはり、「身体」というテーマを出したことが大きかったと思います。つまり、演劇で何を見れば良いのかという際に、今年の場合は『身体』を見れば良いということがすぐにわかる。だからテーマははっきりしていた方が良い。質問に来る人も、私(内野先生)が言っている身体と、例えば前の講義で認知科学の先生が言っていた身体は違うんじゃないかというようなことを言うんですよ。自分の身体は一つなのにどうして違うんだって。それはやはり切り口の違いであって、理論的に構築されている身体というものもあるし、演劇の場合は生身の身体のイメージを考えるのであって身体そのものではないから、当然違って来るんだみたいな話を立ち話でしたのを覚えています。

**石井**　そういうところがやはり彼らにとって面白いことだろうと思うし、彼らに与える影響としても大きいと思います。

**内野**　だからやはり、表象文化なんてあまりにも茫漠としているわけだから、そういう具体的なテーマを出して、それを文理融合的にやったということが、今年は良かったと思いますね。

**学生派遣**

**石井**　今年から試験的に学生派遣を行ったのですけど、かなり反応が良かったです。例えば先生が今おっしゃたように、同じものを見せても反応が全く違う学生に、一緒に同じ授業をして話し合わせる。そうして彼らに自分たちの違いを認識させるというのは、結構面白い問題じゃないかなと今考えています。

**内野**　それは本当にそうだと思う。今の学生を見ていると思うのは、自分を対象化できないんだよ。要するにラカン的にいうと欲望する主体になっちゃって反省しない。でも反省する機会ってそういうところで出てくるわけじゃない？　日本人に何か否定されたら、どうロジックで負かせるかみたいな話になるけど、中国の人がそう言ったら、ああそういう見方もあるのか、じゃあ何で自分はこう思ったんだろうっていう風になってくればすごく良いと思うんですよね。

**石井**　先日派遣した日本人学生たちも、今先生がおっしゃったように、自分を初めて対象化するような経験が一番ショックだったみたいなんですよね、そういう意味でこれはかなり有効なのではないかという気がしました。

**内野**　東大の子達が向こうに行くのも重要だと思うんだよ、あるいはそういう話し合いをする場を設けるとか。こういう特別な機会じゃなくて、交換留学とかで一緒に生活をするレベルまでやると良い。一人で行ってしまうアイコムだと、やはり巻き込まれる感があるから、もうちょっと大人数で行って共同で何かやるとかね。

**石井**　受け入れるにしても送るにしても、確かに人数って問題だと思うんです。一人だと巻き込まれてしまって大変なばかりになってしまうかもしれないし、あんまり大勢だと向こうに租界を作ってしまう。ちょうど良い人数ってどれくらいなんでしょうね。

**内野**　位置人だとね、民族主義者になって帰ってくる傾向が強いんですよ。まぁでも少なくとも租界を作ってしまったとしても、授業のレベルでは必ずアクティブになれるようにすること。プログラムというか、設定の仕方が大事だと思うんだよね。

**石井**　今回の授業の中で、強制的に話し合いや討論をさせたという授業がいくつかあって、内容としても面白いんですけれど、学生の反応としては、そういう強制的なきっかけでお互い打ち解けられたということがあったようです。

**内野**　中国の大学の一般的なスタイルって、やはり一方的に講義する形式だよね。ディスカッションがあるとなると、何か質問しなきゃいけないっていうプレッシャーがある。そういう、授業形式の違いはどちらが良いのかとか、一クラス何人が良いのかとかを、向こうの学生を混ぜて学生同士で話すような場もあっても良いかもしれない。

**演習形式の授業**

**内野**　演習形式の授業も考えて良いんじゃないのかな。例えば現代社会とか政治とかグローバリゼーションといったテーマでいくつか導入的な文献だけを紹介して、皆で議論するみたいな。

**石井**　今まで考えてもみませんでしたけど、演習形式も確かにあり得ますよね。せっかくですから、やはり向こうの学生に対しては今までと違うことを見せて、やらせてあげたい。あまり演習形式の授業って中国でやらないんですよ。

**内野**　集中講義だから、事前に渡してというのはちょっと難しいところがあるよね。だけど例えば単純に、何かテーマを決めておいて、基礎文献を一つぐらい指定しておいて、その後は新聞記事をその場でちょっと読んで、どう思うかということから始めて、みたいなことは可能かもしれないですよね。それはやはり社会科学の先生の方が、基礎知識の点で良いかもしれないけど。

**学生に何を見せるか**

**石井**　南京の学生が東大に来たら私たちは何を見せるのかという問題がありまして。私はそのままを見せるべきだと思うんです。講演会とかを彼らのために開いたりはしないで、日常的なものを見せる。彼らが南京にいて一番見えてこないのはこっちの日常だと思うんです。日本人が向こうに留学しても留学生寮に閉じ込められるし、日常ってあんまり見えてこないんですよ。

**内野**　でもそれはそれで一つの日常で、素顔という意味では寮に住まわせた方が良いと思う。中国語がある程度できないと鬱屈しちゃうと思うけど。やはりさっきのあなたの言う日常の、そのまんまではないにしても、打ち解けたらいろんなことを話せるわけだし、寮にいるってことは結構重要なんじゃないかな。

**石井**　実は今回の学生派遣でも、日本人を二人一部屋にしたんですよ。それが良かったって皆言うんです。ある意味、大学の中での交流としてもすごく刺激的だったみたいです。同じところに住まわせて、強制的にインタラクティブな状況を作ってやるというのはやはり重要ですね。本日はお忙しいところ、いろんな話を本当にどうもありがとうございました。

（文責：赤木）

# 思想史の中の身体 ――精神分析学を中心に

原 和之

2010 年 3 月 11 日（木）～12 日（金）

## 講義概要

西欧思想史における身体をめぐる思考は、心身二元論によって強力に枠づけられていたが、20 世紀に入るとこうした枠組を乗り越えて身体を思考しようとする試みが登場してきた。精神分析は、心身の双方に症状を生ずる「ヒステリー」という問題に答えを与えようとする中で、「身体的なもの」と「心的なもの」の関係を独自の視点から捉え直すことを余儀なくされた。そこから展開された精神分析の議論の中で、身体がどのように捉えられているかを検討してゆく。

## ヒステリーに関する諸研究

1861 年、ブロカは発語能力の座は脳の一部に存在するという発表した。これは解剖という実証的な手法にもとづいて、言語という精神的な活動を、身体の特定の部分に座を持つものとして提示した最初の例である。こうして身体と精神の間の界面が、それまでとは異なる方法で捉えられるようになった。

当時、ヒステリーの原因となる解剖学的な損傷は特定されず、ヒステリーは、いわゆる器質論的な当時の医学のパラダイムから外れる病気であると考えられていた。シャルコーはまず、ヒステリーの症状と経過を臨床的な表として提示し、これを一つの病気として捉えることを可能にした。更に彼は、金属による微弱な電流はヒステリー症状の解消を引き起こすと考えた。

## フロイト

フロイトは、患者がヒステリー症状について語ると軽快するという現象から、この言語化の不在こそが、ヒステリーの原因であると考えた。しかしヒステリーは、精神的な症状だけでなく身体的な症状をも引き起こす。心的なものが身体的なものに作用する「転換」は、どうして起こりうるのか。

フロイトのモデルによると、ニューロンは刺激として受け取った「量」を失おうとし、そのエネルギーを隣接するニューロンに与える。ニューロン間では、いったん「量」が流れると抵抗が弱まり、流れやすくなる。更にフロイトは、大量の「量」の侵入は苦痛、放出は快と感じられるという仮定を付け加えた。外界から受け取られたエネルギーは、「量」として伝導されてゆく。そして本来の「量」の「放出」が阻害され、度を超えて備給されると、ヒステリーなどの心的症状として表れてくる。ニューロンの中には、量が備給されると、体内から由来する刺激を解放する「鍵ニューロン」がある。こうして解放される刺激は、感覚器官を介することなく届くため、量的に大きなものとなり、「症状」を引き起こすものとなる。

一度「量」の流れたニューロンの間には、「通道」が成立するはずだが、臨床の中では、そうした激しい反応を引き起こすような思い出は、むしろ思い出すことの難しいものになっていた。そこでフロイトは、当初の仮定に次のような仮定を付け加えた。すなわち「量」が備給されているニューロンは「通道」と同じ効果を持つ。そして鍵ニューロンの側面に「量」が備給されることで、量の流れを鍵ニューロンから逸らすことができる。このような側面備給を可能にするために、装置の中には一定の「量」が貯蔵される。このメカニズムが、「自我」と呼ばれる。

フロイトはヒステリーの病因を、主体にとって受け入れがたい、無意識化した主体自身の願望であると考えるようになった。そうした願望の範例として彼が挙げたのが、母への愛着とそれを妨げる父への憎しみである。この関係を、フロイトは「エディプスコンプレックス」と命名した。子供は自分の身体の幾つかの部分に生ずる刺激とその解消から快を得ようとする。そうした「部分欲動」が、最終的には他者に向かうようになる。これがいわゆる「リビドー発達論」のシナリオである。

## ラカン

ラカンは身体を、抽象的な「言語」の空間の中におくことで、その複数の次元を欲望との関係において明らかにしようとした。そこから彼は、フロイトの構想したリビドー発達論に、一貫した

「欲望の弁証法」という形を与えた。

ラカンにとっての「言語」の営みとは、他者の言葉を聴き、その欲望を知る営みであった。精神分析において、患者は分析家と語らううちに、「聴取」の立場にも身を置くことになる。「相手が言おうとしていること」の理解方法として、ラカンはまず、聴取とは、発せられた「シニフィアン」(言語の構成要素)のあとに続くはずの、言語体系的に限定されてくるシニフィアンの中から一つを選び取ることだとした。この、精神分析のなかで成立する主体間の関係と同じ構造が、エディプスコンプレックスにおける他者との関係の進展の中にも見出される。

ラカンは前エディプス期の母子関係から出発して、最終的にエディプスコンプレックスまでのプロセスを一貫した「欲望の弁証法」として再構成しようとする。そして身体は、少なくとも3回、それぞれ異なったかたちでこのプロセスに関与する。

(1)**他者の身体的な現前**:ラカンはこの弁証法の出発点に、他者(〈母〉)の現前を求める原初的な欲望を想定する。〈母〉は時に呼びかけに応じないことによって、子供は「他者の欲望」を想定するようになる。

(2)**欲動の対象**:自分がその欲望の対象(「想像的なファルス」)を持っていれば、〈母〉は私のところに来てくれるはずだ。こうして「欲動の対象」を介して、子供は〈母〉を自分の側に引き留めておこうとするが、完全に成功することはない。この突破口は、〈母〉も、「欲望」を欲望しているという新しい想定によって開かれる。これは〈母〉の欲望の対象として定義された「ファルス(φ)」に、別の欲望(〈父〉)が代入されるということである。

(3)**ファルス:性差の引き受け**:〈父〉は、ある名前を持っていることによって、〈母〉の欲望の対象になる。子供はその名を継ぐことで〈父〉の地位を継承することができる。これが〈父の名〉による解決である。しかし〈父〉と子供は、同じ名前を持ちながら、一方は〈母〉の欲望の対象であり、他方はそうではない。こうして、男性器が、父の徴たる「ファルス」として機能するようになる。そしてファルスをめぐり、「まだ持たない」者である男児と、端的に「持たない」者である女児との異なったポジションの分節化が成立する。これが性差の引き受けの条件となっている。

フロイトにおいて身体は、快感原則を一貫した形で提示するものだった。ラカンの場合、身体はそれ自体、一つの欲望の対象であり、背後に未知の欲望を隠している一つの象徴として現れてくる。

「欲望の弁証法」の中の身体的なものは、欲望との関わりにおける、新しい身体への関係を提示するものである。それはまず、他者=対象としての身体であり、シニフィアンとしての身体であり、来るべきものとしての身体である。これは非常に広い意味において、「象徴としての身体」と呼ぶことができるだろう。

## 質疑応答

Q. 1950 年代の日本の精神医学においてはドイツ語しか使われていないというのは本当か。また、それはなぜか。

A. 20 世紀の日本の医学研究の中でドイツ語は非常に大きな比重を占めていた。日本が開国した 19 世紀後半、医学の先進地がドイツであり、医学を勉強するということはドイツ語で書かれたものを読み、理解するということであったためである。その状況は比較的最近(1950～60 年代)まで続いていた。ただしドイツ語の優位は少しずつ薄れてきている。それは医学の先進地が、現在では英語圏の国へ移ったということがある。

Q. ルース・ベネディクトの『菊と刀』における日本人に対する評価は正しいと思うか。

A. ベネディクトが取り扱った過去の日本と今の日本を区別して考える必要がある。ベネディクトの取り上げている文化は、おそらく私の親の世代くらいまでは非常に妥当な部分を持っていたと思う。しかしそれが今も同じように通用するかというと、若干疑問の余地がある。

Q. 精神的な病気の原因は身体からなのか精神からなのか。

A. フロイトがこの発見をしたのは今から 100 年以上前で、当時の科学的な知見をもとに、ヒステリー患者に身体的な損傷は無いと言っていた。しかし今の科学からすると、そこに別の身体的な損傷や変質というものを見出すことは可能かもしれない。

Q. 言語化によってヒステリーを代表とするいろいろな症状が治療できるというが、不可能な場合もあるのではないか。

A. 精神分析の歴史の中で、これは非常に問題が多い症例といわれており、現実の患者の症例と、本の中に書かれた症例がかなり異なっているという歴史的な研究がある。言語化による治癒体験がどういうことなのか、治癒が事実としてあるのかということをもっと厳密に考えてみる必要がある。　(文責:赤木)

## 原先生インタビュー

2010 年 7 月 6 日 駒場キャンパス 9 号館 LAP 会議室

### 学生の反応

**石井** 初めての中国で、学生はどうでしたか?

**原** 受け入れをしてくれた学生というのは、すごく日本語はできるし知的な好奇心もあるし、すでに 1 年くらいずつ日本に行ったことがある人が最初はついていて、良かったです。特に 1 日目の 2 人が、すごく良い感じで。ややこしい話にもきちっと関心を持ってくれて。精神分析の話とか、全然なじみは無いはずなんですけど。講義の通訳も脱線を含めてほぼ完璧に再現していたとのことでした。しかも読み原稿を渡したのがたぶん 2 日前くらいっていう状況だったので(笑)。今例えば駒場の学生でフランス語系で、そういう状況でテキスト渡されて対応できるのがどれくらいいるかっていうと、かなり、うん、どうかなっていうところなんですけどね。

**石井** レベル的にはすごいですよね。通訳をやったのが 4 年生です。ただ例えば今お話にあった精神分析的なものとか、思想史とかそういうものに食らいついてこれるかとか。

**原** もともと精神分析の話自体すごく前提の多い話なんで、西欧の 20 世紀っていう文脈がわかってないと、という部分が結構あったと思うんですよ。あとでいろいろ話を聞いてみて、分析関係の考え方自体、まだあんまり入ってってないということがあって、まぁちょっとわかんなかったんだろうなって。

**石井** でもできれば、身体論でもそうですけど、そういうテーマが向こうに無いからこそ持っていきたいと思うんですよね。

**原** もう少し症例みたいな話ができれば良かったんだと思うんですが、私は臨床家ではないので、自分が持っている症例ってのは無いんですよね。だから本当は、有名な症例を紹介するというのが一つ考え方としてあるかと思います。ただ話をするときに、普通の心理学とどこが違うのかっていう話から始めるとすると、1 回や 2 回じゃ終わらないことになってしまうので。

**石井** 反応としては、例えば前期課程の学生に駒場でやるときと、向こうで違いましたか?

**原** これは年によってずいぶん違うんですけれども、総合科目で例えば精神分析をテーマにしてる時ってのは、終わった後質問が来て 30 分くらい帰してくれない年と、あっさりと終わってしまってっていう年と。あと、今回は身体論っていうことで、精神分析と身体という接点の設定の仕方がちょっと難しかったかな、と思いますね。

### 集中講義からテーマ講義へ

**石井** 講義全体として統一テーマを設けたというのは。

**原** それはすごく良かったと思います。同じ話題についていろんな観点から話を聞くってことはすごく面白いと思うし。課題としては、どうやって筋を通すのか、ということですよね。テーマ講義の全体を最終的に統合するのは学生におまかせって形になってるので。その間をつなぐってことをしてあげるとすると、相互に言及しあうのが一番無難な関係の作り方だと思うんですけれども、そのためには講義の材料が、始まるよりもかなり早い時点で共有できていないとできないことですよね(笑)。テーマ講義(※駒場冬学期)に関しては、本郷の先生方はどのくらい参加しているんですか?

**石井** えっと、本郷は 2 名です。国吉先生と廣瀬先生です。

**原** ということは、この間(※南京大学集中講義)参加して頂いたお 2 人に関してはご参加。うまいやり方だと思うんですよね、つまりいきなり駒場に来てくださいって言うと向こうはあんまりメリットを感じないかもしれないんだけれど、ああいう形で大学と離れたところでいったん集まっておいて、それでじゃあこの線で駒場でも、というのはやっぱりすごくいいんじゃないかと。南京に出向いて講演するっていうのはある意味イベントじゃないですか。そういう好奇心はどの先生も持ってると思うんで、それに訴える形でうまく入ってもらいたいですね。

### 日本人と中国人

**石井** やはり違う国で話をするというのは、文化や背景が違う人ってのは感じ方が違うものなのでしょうか。

**原** 精神分析の考え方ってのがどういう文脈で登場してきて、その中で常識とは違う形で身体が考えられてるっていう話をしたんですけれども、バックグラウンドがまだ無いのかな、という気がしました。つまり、身近に感じられるような問題をたてて、それが学問だとどう答えられているかという形にはしなかったので、それがちょっとまずかったかなと。今回はヒステリーの問題を説明したんですけども、やっぱりヒステリーという病気自体、あまり自分の問題としては考えてもらえなかったのかなって気がするんですよね。

**石井** 逆にそういう授業に日本の学生と中国の学生両方参加させて、反応の違いを見られればかなり面白いんじゃないかと感じますね。それにもう一つ、面白そうだと思うのが、今回行った日本の学生さんたちが、自分の想像と全然違ったと。

**原** 私も多かれ少なかれそういうところがあって、街の姿なんかにしても、あんまり日本と変わらないじゃないですか。全然知らないところでいろいろ想像をたくましくしているうちに、極端な姿を思い描いてしまうっていう部分はあるわけですよね。そういうのがいい意味で抜けたなという気がしていて。中国系の人で、日本に興味を持ってくれている人がこれだけいるんだってわかっただけでもずいぶん違うと思いますよね。だから学生はどんどん連れていくべしと思います。凝り固まっちゃってるところがありますよね。向こうは必ずしもそうじゃないんだって思えると、中国の人たちとのコンタクトで失敗する可能性は少なくなると思いますけどね。

**駒場のメルティングポスト**

**石井**　精神分析というと、ちょっと文理融合的な側面もあると思うんです。こちらのプロジェクトの目的の一つとしては、文理を融合させた教養教育を持っていきたいと考えているのですけども、そこらへんのとっかかりとしては何か?

**原**　そうですね、いわゆる文理融合の枠には結局入らないのかなと。分析の考え方が展開される中で理系的なものを参照しながらやってきた部分はあるんですけども、いわゆる理系の自然科学的なものとの接点は最終的に無くなってるような気がするんですよね。それよりもむしろ患者さんとの接点の中で考えるという態度の方が優勢になってきているので、そっちの方に接続するのは少しステップが必要かなという気がします。

**石井**　身体論以外に先生のご専門のことと何か連鎖していきそうな、統一的なテーマをもし立てるとしたらどんなテーマが他に考えられると思いますか?

**原**　漠然としているんですけど言語論ですね。言語ということに関して精神分析はかなり広い考え方をしているので、その考え方を説明する。言語心理学の専門家がここにいますし、いわゆる認知言語学をやっている人もいますし、そういうどっちかっていうと理系の方からのアプローチもできれば、歴史の中の言語とか、UTCP 関連でいえば東アジアのエクリチュールみたいなことができるわけですよね。だからそこらへんのリソースはもっと使えば良いのになというのが、個人的にはあって。

**石井**　そうですよね、せっかくあるものはどんどん使って回していくのが理想的かなと私も思います。

**原**　もちろん、授業には学生に対するサービス提供という側面もあるわけですけれども、それを機会にして、いろんな形で教員同士が接点を作っていくというのが理想だと思うんですよね。でテーマ講義だと枠を設定されてる所に出向いて話してそれで終わりとなってしまうんですけど、もう少しまとめてみようかみたいな話を南京講義だったらできると思うんですよね。

**石井**　それがうまくできれば、南京で集中講義をするっていうことだけでなくて、もうひとつ何か意味が出てくると思うんですよね。

**原**　駒場のメルティングポストとして機能していただければ(笑)。そこに行くといろんな人がいるっていう場所になると面白いとは思うんですけどね(笑)。

**石井**　あと学生の派遣の話も混ぜていけば、一つの講義をしたときに出てくる反応というのが全然違ってくると思うんですよね。その反応を見てまた講義を考えるというふうに持って行けたら良いなと思うんですよ。そういうところを情報としてどんどんためていって、どういう講義によって何がつかめるのかということを考えていけたらと思っています。

**原**　そうですね、理想的な FD の姿だと思いますよね。ある種対照実験ができるわけですので。

**南京側の声**

**石井**　あともうちょっと、南京側の声が集められたら良いなって。

**原**　向こうにインタビューには行かないんですか? 実際に通訳とかした人と、学部生と、あとは院生レベルとそれぞれ聞いて頂いて。まぁサンプルの取り方はいろいろあると思うんですけど。それは行ってもいいんじゃないかな。実質的な記録にするという意味でも。

**石井**　そうですね。それは欲しいですね。それに、そうやってちゃんと話を聞いていると向こうも何か意識を持つかもしれないし。向こうの先生に聞くというのもありですよね。もっとこう先生同士の間でもインタラクティブにできると良いかなと。

**原**　私は初日は確か歴史の先生だったのかな。次は言語学の先生で。言語学の先生の方は食事を一緒にしたときに少し話をしたんですけれども。時間的に制約もあったりしたので、それがちょっと残念と言えば残念。前夜祭ができれば良かったんですけどね。ただどういう材料にするのかというのがちょっと難しいところですし。中国語の字幕になってるものを探さなくちゃいけないとなると。やっぱり題材は限られてくるかなという気がしますね。

**石井**　あと学生の層なんですけど、今回はレポートを出してくれた学生が全員修士 1 年生で。でもせっかくだから向こうの学部生、4 年生 3 年生にも、レポートを書いてもらいたいなって思うんですよね。通訳をやってくれた人はみんな 4 年生なわけですし。

**原**　まぁそのへんが一番興味を持ってくれる層だってことですよね。さっきの相手方のインタビューはやっぱりやった方が良いと思うんですよ。こちら側だけ聞き取りをして頂いても突き合わせないとというのがあると思う。

**石井**　今回レポートだけで感想もなかったので、やっぱりそれはわからないところですね。今日は長いことありがとうございました。

(文責:赤木)

# ヒトの認知に対して身体のもつ意味

植田　一博

2010 年 3 月 16 日（火）～17 日（水）

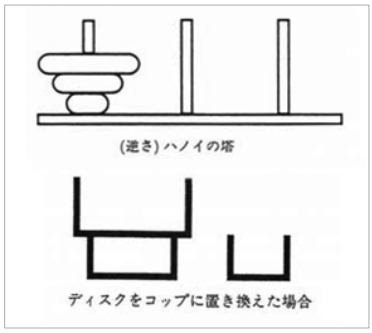
## 講義概要

本講義では認知科学や認知脳科学の立場からの身体論への接近に関するこれまでの試みについて紹介する。初期の認知科学においては、人間の頭脳のみが注目され、身体が人間の認知や知能に対して重要な意味をもつという事実自体がほとんど無視されることになった。しかしながら、そうした知能観では説明できない多くの認知現象がやがて報告されるようになり、身体が人間の認知や知能に対してもつ意味を解明することが研究対象になってきた。特に最近では、身体が人間の認知や知能に対してもつ意味が認知脳科学の観点からも議論されるようになった。

## 古典的な認知科学の人間観とその変遷

人間を、汎用的ルールに基づいて問題解決を行う論理的な装置としてとらえる人間観が、認知科学の出発点である。しかし、論理的な基本構造は同じで、表現が異なる問題群（異種同形問題）の間では、人間の解決パフォーマンスが大きく異なる場合があることが知られるようになった。

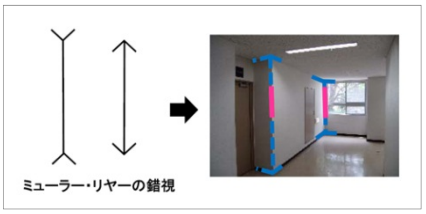
例えば、逆さハノイの塔は、3 つのルールの下、3 枚のディスクを上から大中小の順に積み直す問題だが、ディスクをコップに変えるだけで正答率が上がる。コップに変えることで、「移動するディスクは移動先にあるディスクよりも大きくなければならない」というルールを記憶する必要がなくなったためである。また、片面に数字、片面にアルファベットが書かれた 4 枚のカードのうち、片面が母音ならば裏面は偶数であることを確認するには、どれをめくるかという 4 枚カード問題の場合も、飲み物を飲む 4 人のうち「酒を飲んでいる人は 19 歳を超えていなければならない」というルールを確認する飲酒問題に変えると、論理学的構造は変わらないが、正答率は上がった。




Zhang, J. & Norman, D. A. (1994). Representations in distributed cognitive tasks. *Cognitive Science, 18*(1), 87-122.

4 枚カード問題と飲酒問題では、規則成立（義務・規則違反）検知の意味合いを持つか否かが大きいのではないかという主張が、実用的推論スキーマ説である。つまりこれは、「裏切り者」の検知をしているということである。更に、進化心理学において、裏切り者を検知するメカニズムは進化的に獲得したものであるという主張がなされた。この立場では、実用的推論スキーマは、人間の生得的な知識であり、無意識的に機能する、暗黙的な知識、身体化された知識（ヒューリスティクス）であるという。

基本的な錯視は、ほぼ全ての人に生じる。そこで、錯視は視覚系の誤作動ではなく、正常なヒューリスティクスの反映なのではないかと言われるようになってきた。ミューラー・リヤーの錯視を、現実の風景に入れてみると、錯視が生じるのは、遠近法理解の上では理にかなっていることがわかる。マスク（仮面）の裏面を凸面に捉えてしまうというホロウマスク錯視の例も同様である。脳の中には、顔は凸面であるという知識があるため、顔状のものを見ると、脳内知識が凸面であると判断してしまうのである。




アイオア・ギャンブリング課題も、ヒューリスティクスの好例である。 損益の額が書かれたカードの山から 1 枚ずつ選択し続け、損益の合計を競う課題であるが、山には期待値的に損失カードの山と利益カードの山があり、1 枚の利益の額は、損失カードの山の方が多い。実験参加者は、40～50 枚目あたりから損失カードをあまり引かなくなり、80 枚程度引いたところで、その理由も明言できるようになる。しかし、発汗によるストレスを測定したところ、10 枚目あたりから、損失カードの山に対してストレス反応を示し始めていた。つまり、意識するよりも早く身体の方が損失カードの山のリスクに気付いていたのである。

## 身体が認知に対してもつ意味

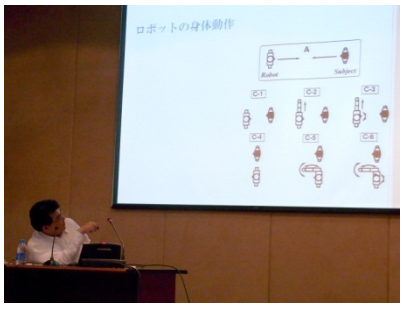
人は外界との相互作用によって認知的なタスクをこなしてい

る。先述の、ディスクをコップに変えた逆さハノイの塔も、外界にある情報をうまく利用している例の一つである。日常生活においては、外界の情報を使って問題解決をするのが基本であり、そのためには身体を持っている必要がある。

空間的な認識において基準となる座標を空間参照枠といい、観察者の身体を中心とする自己中心参照枠と、観察者の身体以外に基づく対象中心参照枠に分けられる。大人はこれらを自由に切り替えられるが、2 歳くらいまでは自己中心参照枠しか取れない。対象中心参照枠への移行には、能動的移動に伴うビジュアル・トラッキングの重要性が指摘されている。動くということ、つまり身体を持っていることが、空間を大人のように把握するためには重要なのである。

同じ高さまで水が入った、太さの異なる 2 つのコップを傾けた時、水がこぼれ始める角度の大きさを問うた時、目を閉じて、手を動かしながら想像させると、そうしないよりも正答率がずっと高いという実験結果がある。言語的な推論や問題解決と、視覚イメージによる推論や問題解決は、脳の中の別の経路で処理されている可能性がある。

コミュニケーション研究において、身体を用いたジェスチャに関する実験がなされた。目の見えない子供同士の会話と、目の見える子供の会話を比較した結果、両群のジェスチャの頻度・形態に有意差は無かった。これによって、話し手のジェスチャが模倣による可能性は低いことがわかった。更に、聞き手が目の見えない人であることをわかっている場合でも、話し手はジェスチャを使うという実験結果から、聞き手に有益な情報を与えるためにジェスチャしているわけではないということがわかる。これらの実験から、ジェスチャは生得的に獲得している表現形式の一つなのではないかと考えられる。また、ヒューマロイドロボットが人に道を教える際、いくつかのジェスチャをするかどうかで案内精度が大きく変化した実験結果からは、言語情報が正しくとも、道案内の際の非言語情報の表出があるかどうかで、説明理解に大きく影響するということが言える。




## 認知神経科学からみた人間の身体と脳の関係

視覚情報は、第 1 次視覚野から、「形態」に関する処理を行う腹側経路と、「動き」に関する処理を行う背側経路に分かれる。このように、脳では機能局在が発達している。したがって、脳の一部を損傷するとその機能が発揮できないということがある。モノの形や大きさを言語的に表現できないのに、把持などの運動はできることを視覚失認という。このような患者は、リンゴを模写しようとしても輪郭が抽出できず、何を模写しているのかわからない。しかし、指はコントロールできるので、リンゴを想像で描こうとすれば、描ける。脳の機能局在によって、見て物体の形を把握するのと、動きの中で視覚を整理するのは別の経路であることからこのようなことが起こる。

一方、身体を介した刺激によって、脳地図は変化しうるということもわかってきた。例えば、片腕を切断した患者に、失った腕の感覚が長く残るという幻肢の現象が知られている。これは、大脳皮質の体性感覚野において、腕からの入力が喪失すると、腕の領域は、隣接部に入力された刺激を処理してしまい、あたかも無いはずの腕から触覚が来ているかのように錯覚するというのが理由とされている。更に、脳が身体を拡張する現象も確認されている。ラバーハンドと自分の手を同時に連続的に刺激し、ラバーハンドだけを見続けると、ラバーハンドから触感覚を感じるようになるというラバーハンドイリュージョンは、脳が、可塑性によって身体イメージをラバーハンドにも拡張するということを意味している。このように、脳の機能局在は非常に柔軟性に富んでいる。ただし注意点として、脳の可塑性は若い人の方が生じやすい。また、損傷した視覚の腹側経路が背側経路で補えない例のように、完全に異なるシステム間では、可塑性は発揮されない。

速読訓練は、単純な視覚訓練によって脳内の処理メカニズムに可塑性による変化が生じ、読書速度が向上すると考えられている。速読者と非速読者の、読書時の脳を計測した結果、非速読者は読書時に聴覚野を使っているのに対し、速読者は使っていないということが分かった。ここから、非速読者は黙読の際、無意識のうちに音声化している可能性が考えられる。更に、速読者は表音文字である仮名を読む際にも音声化せず、表意文字である漢字を処理する部分を使っているという仮説が立てられている。一般的に、仮名は聴覚野で意味処理を行い、漢字の処理は顔などの情報を処理する部分に近いとされている。この、仮名処理と漢字処理の、読解の二重経路モデルについて、現在研究が進められている。

（文責：赤木）

BBS（交流論壇）より

◆ **植田老师讲座感想** 南京大学学生 2010/03/23 22:53:35

您好！欢迎来到南京大学，也非常感谢您带来的精彩讲座。您通过一些事例，向我们介绍了人的认知方式是如何形成的，让我们大开眼界。同时，我觉得和国吉老师的观点也有照应。我感兴趣的是，为了生存，大脑、身体与环境共同影响人的认知，那么，就是说人选择环境的同时，环境也在塑造人。这点似乎可以用来解释异文化的根源，譬如中日两国国民性或思维方式等方面的差异。我相信，中日两国国民的大脑构造是大致相同的，而同时中国人之所以是中国人，日本人之所以是日本人，并非因为身在中国或日本，而是被所处的环境在认知上施加了极大的影响，继而这种认知方式又引发一些其他东西，这一点和文化人类学也是相通的。不知道这种理解有没有问题，谢谢！

植田先生こんにちは。南京大学にようこそ。先生の素晴らしい講義に感謝いたします。人の認知はどのように形成されるのかという先生のお話によって、私たちのものの見方が大きく開けました。また、私はこの話は、國吉先生のお考えとも通じ合うものがあるように感じました。私が興味を持ったのは次のような点です。生存のために、大脳、身体と環境が共に人の認知に影響し合っているならば、人が環境を選択していると同時に、環境のほうでも人を形成しているといえます。この観点は、文化の違いの根源ー例えば日中の国民性とか、思考方式の違いとかーを理解するために使えるように思われます。私は日本人も中国人も、大脳の構造はほとんど同じであると思います。と同時に、中国人が中国人である所以、日本人が日本人である所以は、けっして身体を日本ないし中国に置いているからではなく、その人の置かれている環境がその人の認知に極めて大きな影響を及ぼし、この認知方式がまたその他の様々なものを引き起こすためであって、この点、文化人類学とも相通じるものと考えています。もちろん私のこのような理解に問題もあるかもしれませんが。有難うございます。

◇ Re: 植田老师讲座感想 植田先生 2010/04/04 18:48:56

コメントを有難うございます。國吉先生の授業と私の授業をとてもよく理解されているので、理解力の高さに感心しています。

おっしゃる通り、國吉先生の講義の趣旨と私の講義の趣旨は基本的に同じです。人の脳、身体、環境が互いに相互作用しながら、人の認知は形作られています。これは他の動物でも同じことですが、人が他の動物と異なるのは、自ら積極的に環境に働きかけることができる点にあります。このことは人の脳のある意味尋常ではない進化を促した可能性がありますが、このことはまだよくわかっていません。

文化差というのも、ご指摘の通り基本的に環境の問題です。発達認知科学では既に常識となっていますが、子供がどの言葉を母語(native language)として話すのかは、両親がどの国の人かにはよらず、どの子供がどのような言語が話されている環境にいるか（つまり、周りの人が中国語を話しているのか、日本語を話しているのか、英語を話しているのか）に依存することがわかっています。そのくらい環境というのは重要なものです。

文化人類学に興味を持たれているようなので、文化人類学と認知科学とを繋ぐような研究を将来してもらえると大変嬉しいです。

◆ **平仮名を漢字化すればいいでしょうか。** 南京大学学生 2010/03/19 15:59:10

植田先生の講義はすばらしかったです。大変勉強になりました。

速読についてちょっと伺いたいと思います。普通の人間は、仮名を音声化して、意味を処理します。漢字の部分は音声化を経ずに意味を処理します。速読の場合は、音声化の過程はないみたいですね。脳の反応時間を短くします。それはスピードが速い原因だと思われます。つまり、音声化をしないと、スピードアップできるということですね。

仮名を漢字化すれば、どうなるでしょうか。たとえば、「ない」という言葉があったら、この「ない」をコンビにして、一つのキャラクターとして読めば、漢字と同じように音声化を経ずにすぐ分かることができます。この「ない」を読めば、「否定」とか「無」とかが分かります。「ある」（存在の意味を表します）「れば」（仮定の意味）など。そうすれば、一部分の仮名コンビが漢字と一緒になり、脳にとって分かりやすくなるでしょうか。

もう一つのことを思い出されました。一部分の人間は単語を覚える場合、他人と違って、単語の形で覚えるんです。彼らはほかのことを覚える場合、大体そうであります。つまり、図形を通じて、物事を覚えます。そういう人たちは上のような発想と同じでしょうか。先生の考えはどうでしょうか。

◇ Re: 平仮名を漢字化すればいいでしょうか。 植田先生 2010/04/04 18:38:41

質問を有難うございます。現在わかっていることではお答えしにくい、難しい質問です。

おっしゃるように、仮名も塊としてとらえれば漢字のように処理することは可能かもしれませんが、初めて読む文章の中ではどのような仮名を塊として捉えて良いのか予想できませんので、漢字のように読めるのか、つまり形から音声化しない

で直接意味を理解できるのかはわかりません。むしろそれはできないというのが研究者の常識です。が、速読者はそれが可能になっているとしか解釈できないような実験結果が得られています。もし速読者が仮名を漢字のように読めるようになっているのであれば、これは相当に大きな発見で、Nature や Science に掲載されるでしょうね。それを目指して頑張って研究を行っています。

一部の人は単語を覚えるときに図形として覚えるというご指摘ですが、これは十分にあり得ます。単語に限らず、様々なものを記憶する際に、自分に馴染みのある図形や物体に置き換えて覚える人がいることは研究で明らかになっています。中には、レストランでのお客さん 80 人分の注文を覚えるのに、自分の好きな陸上競技の記録に置き換えて覚えられる人がいることも報告されています。単語から瞬時に意味をとるのと単語を覚えるのは、脳の働きとしては別のものであり、記憶に関しては、仮名からなる単語であっても図形として判断して覚えることは可能なのです。

**◆ 脳のホムンクルスについての発想** 南京大学学生 2010/03/17 16:29:56

人間の脳というのは、本当に不思議な器官だと思います。人の脳のホムンクルスによると、人間は怪物みたいなものですね。頭も大きすぎますし、手も大きすぎます。これは人間身体の未来の進化方向だと推測できますか。先生はどう思いますか。

◇ Re: 脳のホムンクルスについての発想 植田先生 2010/04/04 18:20:07

質問を有難うございます。とても良い質問だと思います。

人の脳がこんなにも複雑で、かつ大きな器官になったのは、最初からそのような設計図があったからではなく、講義の中でも少し触れたとおり、人が環境に適応するように進化してきた結果であるというのが最近の主流の考え方です。人が生物として生きるには、物体の動きを理解し、自ら動く中で周囲を認識することが重要なため（でないと、人は獲物を捕まえることができませんし、逆に他の動物の餌食になります）、視覚に関しては最初に背側経路が進化したと考えられています。その後、何らかの環境や人の生活の変化により、物体の形や色などを認識することが必要となり、腹側経路が進化してきたと言われています。このように人の脳がどう変化するかは誰にも想像することができず、人と環境との相互作用によって決まるものだと理解するのが良いと思います。

もしわれわれが住んでいるこの環境が大きく変化しなければ、手や足の重要性がより増すでしょうし、環境に大きな変化が生じれば、人の脳の中ではかなり後退している機能の重要性が増して、長い年月をかけて人の脳はまったく別の方向に進化することも考えられます。

**◆ 植田先生へ** 南京大学学生 2010/03/17 16:29:56

先生の講義はすばらしかったです。

ジェスチャについて質問があります。確かに世の中には、ジェスチャを用いない人間もありますね。つまり、ジェスチャを用いるかないか、それは個人的な習慣です。実験によりますと、話してが目の見えない人たちにジェスチャを用いて話しました。その場合、話し手はもちろん、ジェスチャ好きの人を前提として実験が行われました。では、普通ジェスチャをしない人々はどうするでしょうか。彼らが話している時、どうしたら会話を補完するのでしょうか。

◇ Re: 植田先生へ 植田先生 2010/04/04 18:20:07

質問をありがとうございます。また返答が遅くなってすみません。

一般的にジェスチャの表出には個人差よりも文化差の方が大きく見られることが知られています。例えば、日本人はアメリカ人よりもジェスチャの頻度は少ないと言われています。これは日本語という言語が、英語と比較して、音声の高低や強弱（日本語では韻律といいます）によって感情を伝えやすい言語だからだと理解されています。講義で紹介した Goldin-Medow らの実験では、そのような文化差を考慮し、アメリカ人だけではなく様々な国の人に実験に参加してもらうような配慮をしています（詳しくは、講義で紹介した"Hearing Gesture"という本をご覧ください）。ですので、ジェスチャを頻繁に行う人たちだけを選んで実験を行ったわけではないことをまずご理解ください。

「ジェスチャをしない人はどうするのか」というのが質問ですが、世の中にまったくジェスチャをしない人がいるのでしょうか？ 自分ではしていないと思っても、実際には相当にジェスチャを行っています。少なくともこれまでの研究でジェスチャをまったくしない人というのは、目の見える人も見えない人も含めて報告されていないので、仮にいた場合、どのように会話で言語情報を補完しているのか想像がつきません。言語情報の補完を韻律や表情、視線で行わない限り、相当に窮屈な会話になるでしょうね。なお、会話で重要なのは講義で紹介したジェスチャだけでなく、上記の韻律、表情、視線も同様に重要なことが最近の研究でわかってきています。

## 植田先生インタビュー　2010 年 5 月 20 日　駒場キャンパス 9 号館 LAP 会議室

**学生の反応**

**石井**　まずは、授業についてどんなふうだったのかな、と。

**植田**　授業自体はほぼ予定通りやることができました。同時通訳が入るので、駒場で 3 回と 4 分の 1 くらいでやる内容を、4 回にしたんですね。内容的にはここの 1～2 年生向けの授業とほとんど同じ内容を話しました。

**石井**　同時通訳はどうでした？ 反応とか。

**植田**　同時通訳やってくれた彼女たちと話した限りでは、非常に優秀な人なので、問題なくいってるんじゃないかと思うんですね。そのあとの、web 上の質問を見る限り、結構鋭い質問があったので、多分同時通訳は問題なかったんだろうと思います。

**石井**　やっぱり質問って日本の学生と違いますか？

**植田**　日本の学生は、ここがわからなかったとかいうのが、質問の 8 割とか 9 割くらいなんですね。で 1 割とかちょっとくらいで、もうちょっと突っ込んだ質問が来る。でも彼らの web 上の質問はかなり突っ込んだ質問なんですね。紹介した実験をもしこうやったらどうなるんだとか、もっと別の観点があって、そっちの方が重要なんじゃないかとか、かなり内容に踏み込んだ質問ですね。

**石井**　なるほど。やっぱりこういう方が、先生としては手ごたえがあるような感じですか。

**植田**　寝ないというのが大きいですね。

**石井**　え、何が違うと言われたら「寝ない」ですか？（笑）

**植田**　うん、つまり熱心さが違うということ。ここの学生は、もちろん前の方にいる人たちは非常に熱心に聴いているんだけど、後ろの方で単位取るために仕方なく聴いてる人ってのは、授業に出てきて寝るんですよ（笑）。そういうのが無いのが良いですね。

**石井**　何ででしょうね、何が違うんでしょうね。

**植田**　やっぱり中国の人たちは、競争していかないと生きていけないからじゃないかな。もちろん日本の東大に入る人だって競争して入ってきてるんだけど、東大入っちゃえばある程度いいやと思うんだろうし、東大入んなくたってさ、そこそこの生活やってけるじゃないですか、日本、今だと。彼らは目が違うんですよ。目が鋭いよね（笑）。

**石井**　じゃあ時代背景とか、環境の問題というのもあるかもしれないし、もしかしたら数十年後には、日本みたいに。

**植田**　なってるかもしれないですね。日本も昔はそうじゃなかったという人が多いので（笑）。

**日中の学生のディスカッション**

**石井**　今回は中国人だけが受けていましたが、もし日本人をここに混ぜるとしたら、どうでしょうかね。

**植田**　そういうふうにいろんな人が混ざるんだとすると、ディスカッションをするとか、こう、文化差が出るような実験をやってみるとか。

**石井**　それは面白いですね。でもディスカッションはやっぱり手間ですかね。

**植田**　せっかく実験系の話をしてるんで、簡単な心理実験みたいなものをやって、それについてディスカッションする方が面白いと思うんですよね。文化差がでそうな課題を、例えば 1 時間目にやってもらって、でそれについて講義をして、最後ディスカッションしてもらうとかは出来るかもしれないですね。ただ、課題が考えられるかね（笑）。いろいろレビューをしないといけない。どういう文化差が報告されているか。やっぱり、ここなら確実に出そうってとこを選ばないと、出ないとつまらないじゃないですか。

**石井**　今回、学生の意見を聞いたところでは、そういうディスカッションが面白かったという。福島先生も清水先生もディスカッションを取り入れていたんですね。で特に福島先生のディスカッションが面白かったようで、大変でしたけど、相当効果が出ましたね。

**植田**　理系の授業の弱いのは、基本的に教えることが多いので、講義形式がすごく多いんですね。もちろんそれ以外に実験とか実習とかはあるんですけど、装置とかそういう問題があるのでそう簡単にはいかないというのがあるというのがまずある。それから結構大掛かりになっちゃう。だから準備に異常に時間がかかっちゃうとか、それから結果が出ても、すぐにその結果が何であるかってのは解析をしないとフィードバックかけられないとかね。そこが理系の実験のネックですね。

**石井**　最初の授業でやって、2 日目にフィードバックをかけるくらいなら間に合うと思いますけどね。必ずしもその場で何か答えが出るとか、一定の理論を教える必要は集中講義では無いと思うんですけれども。

**植田**　そうすると理系の授業をやってる意味ってのは薄れるかな。やっぱりいろんな理論がかなりしっかりあるので、その意味を伝えないってことは、講義をやる意味が半分くらいは無いんですよ。で、実験結果がどうであろうと、理論は理論として伝えられるというのが大事で、できれば実験結果が理論をサポートしてくれていないと、学生はあんまり楽しくないかなーという。

**石井**　どれくらいの学生に来てもらえるとこちらとしてはやり

やすいかとか、ターゲットにしやすいとかありますか。

**植田**　この講義であれば別に多くても全然かまわないんです。もし本当にディスカッションするとか演習するとかになると当然上限があると思うので。皆が発言することを考えると、やっぱ 14 人とかさ、15 人くらいまでだよね。

**石井**　今回は、ディスカッションしたのが日本人も入っていた授業だったので、ディスカッションの内容だけではなくて、一緒に話を強制的にさせるというのが、結構面白かったという意見がありましたね。

**植田**　なるほどね。日本人はあまりそういうのやらないから良くないんだと思うんだけど。

**石井**　やっぱり発言してみないと相手の反応はわからないし、それこそ、日中で一緒にやるんだったら中国の学生との交流もできませんしね。それは重要なことですよね。

## 文理融合

**石井**　理系の学生、もし大学院生が行くとしたら、この授業は役に立ちますか?

**植田**　少なくとも今回のテーマは、情報系の人とか心理系とか、認知科学とか、機械系の人とか役に立つんじゃないかな。

**石井**　大学院生、博士課程くらいになるとちょっとまずいでしょうか。

**植田**　いやそんなことないですよ。博士課程だって今の分野の人だったらものすごく役に立つと思うんですね。多分院生にとって役に立つかどうかはテーマ次第だと思いますよ。もちろん、全部の理系生にとって役に立つテーマってのは多分ほとんど考えられないと思うんですけど。やっぱりさ、大学院になると専門性が高くなるので、万人向けの授業ってのはなかなか難しいですよね。やっぱりある程度ターゲットを絞ってテーマを考えないと、理系の院生には難しいでしょうね。

**石井**　そうですか。今回学生の話を聞いてみると、何が面白かったかと言うと、授業の内容の他に、文理融合型の授業の中で、理系の学生と文系の学生が混ざっていて、お互いこんなこと考えているんだというのがすごくわかったということ。

**植田**　それは多分文理融合に興味ある人が来てるからなんですよ。でも全員が興味あるわけじゃないわけですよね。だから、やっぱり万人向けなんてのは難しいと思うんですよ。文理融合は文理融合で良いと思うんだけど、それは文理融合に興味ある人をターゲットにしてるんだって思ってないと駄目ですよね。誰でも OK だなんていったら、それは絶対成り立たないですよね授業が。

**石井**　なるほど。もし理系の大学院生なんかがもし混ざったら、私がもし参加するとしたら面白いだろうなと思いますけどね。

**植田**　だからそれはね、面白いと思う人ですね。で本来はそうあるべきだと僕も思うんだけど、現実は違うんですよ。やっぱり自分の専門を極めるということが一番大事だし、そこにエネルギーを集中したい人がいるしね。例えば、僕がいるところの広域システムも、文理融合型の理系の研究をするっていうとこなんだけど、当然僕らはそういう理念で入ったから、専門関係ないのにも結構出て楽しんでたわけですよ。で、ところが最近はそういう学生はものすごい減ってんのね。今は社会全体として、やっぱり専門性を高めるって事が重視されてるように思うし。多分そういうようないろんな理由があって、現実としては学際的なことに興味持ってる人は減ってるかなと思うんですよね。

**石井**　私たちは沢山の分野の人に参加してもらいたいんですけども、理系の学生とかにとって、この授業を受けることでどういう意味が得られるかとか、ありますかね? 他分野に興味を持つことでどんなメリットがあるか。

**植田**　うーんそれはさ、すごく答えるのが難しくてさ、直接的なメリットって多分あまり無くて、間接的なメリットなんですよ。或いは将来役に立つかもしれない。それをね、理解してもらうのがすごく難しいんですよ。だからそういう意味で、全員が自主的に好んで出席する授業っていうのは、なかなか難しいんじゃないかなという気がしますね。

## 要望など

**石井**　授業についてもっとこんな風にしたら良いとか無かったですか? 部屋とかもっと小さい方が良いとか。

**植田**　部屋はね、人数に合った部屋が良いです(笑)。それから……机の位置があまり良くなかったかな。僕らが話すときの壇上の机の位置がスクリーンの前側にあったじゃないですか、あれすごくやりにくいんですよ。あとできればピンマイクにしてもらいたいと。というのは、理系の先生で座って話す人は珍しいのよ。パワポに図とか資料とか載ってるじゃないですか、で口で言うの大変だからここって言いたいわけですよ、その時に直接指せないってやっぱり大変で。

**石井**　あとは向こうの学生に対する要望とか、何か。

**植田**　要望特に無いですよ、しっかり聞いて頂いてもらったと思

うし、ちゃんと質問もしてもらったし、講演の時は一杯質問来たし、あの後また個人的にメールくれて、この部分の資料無いのかとかね。だから、全然僕は学生さんには不満は無いですね。

**南京大学の学生受け入れについて**

**石井**　学生派遣で今度受け入れをしようとしているんですね。向こうの学生を 10 人くらい呼ぼうとしているんですけど、その時にどういう形で呼ぶか。どういうことをこっちでやるか。

**植田**　日本語できる学生さんでしょ？ 特別その人たちのために授業するよりは、こっちの授業に出てもらった方が良いですよね。もちろんなかなか取りにくい授業はあると思うんですけれども。

**石井**　理系はどうなんでしょう。

**植田**　中国の理系の学生さんが大学 1 年くらいで何をやってるのかよくわからないんだけども、理系ってかなり積み上げ式なので、基礎ができてなくて出ると多分相当大変だと思います。あんまり軽々しく受け入れると却って大変だと思いますよ。

**石井**　文理融合っていうか、1 年生 2 年生で、文系が入ってもわかるようなそんな理系の授業とかありませんか。

**植田**　総合科目の中で、分類で E とか F の中には、理系向けと文系向けがはっきり分かれて書いてあると思うんですよ。「文系向けの」何とかとかね。いくつかそういう授業をピックアップして、これは出ろって言うのはできると思うんですよね。例えば僕の持ってる授業だと情報科学概論Ⅱっていう藤垣先生と玉井先生の 3 人で持ってる授業なんですけど、これはもう文理関係なく皆さん出てくるので、文系が 3 で理系が 2 ぐらいかな。

**石井**　例えば講演があるときにぶつけるとか、駒場祭があるときにぶつけるとか。

**植田**　駒場祭だけで 3 日あってさ、そのあとに休みがあると授業にほとんど出られないじゃないですか。例えば五月祭の時にしてあげたら良いんじゃないですか？ 五月祭はここは休講にならないじゃないですか。で土日は五月祭行けば良いわけでしょ。例えば駒祭の最終日くらいに来てもらって、まず駒祭を見て、で翌日午前中は休講だけど午後からは授業あるじゃないですか、だからそこで出てもらうとか。駒祭をまるまま絡めると、授業じゃなくなりますよね。

**先生にとってのフィードバック**

**石井**　最後に、先生はこの授業を担当されて、何かこれは新しい面白いなという風に、フィードバックってありましたか？

17 日に行われた植田先生の講演会の様子

**植田**　うーん……質問は鋭いんだけど、まぁ想定される質問だったので、質問で何かすごいフィードバックを受けたという感じはあまり無いかな。多分僕の話してるテーマからしても、中国人としての特性とか気質がね、強く出るというものではないと思うので。要するに文化に関する授業とかではないからさ、人間一般に存在する認知の話なので、そこはあまり中国人だから特別というのは無かったですね。だからある意味発見と言えば、中国人も同じようなことを疑問に思ってるんだなってのがわかるということだと思うんですけど。もっとポジティブなフィードバックがあったかと言うとそうではないと思うんですね。何かあとあったかな、予想以上にまじめで熱心で。

**石井**　学生にとっては重要だと思うんですよね。同じように考えられる可能性もあるというのは、これは何か文化交流的な問題になっちゃうんですけれども、あの、日中間ってすごい対話がすごく難しくて、ずっと矛盾を抱えてきたんですよ。でも学生同士で話し合わせて、文化の違いとかこの人たちと話が通じるかってのを体験的にどっかで知っているっていうのは、彼らにとってはすごく良いと思います。希望としては、先生にとっても何らかの得るものがあるプロジェクトであれば良いなとは思っておりますけど。本日は長いことありがとうございました。

（文責：赤木）

# 盲ろう者の視点で考える障害学と身体

福島 智

2010 年 3 月 18 日～19 日

## 講義概要

障害とは固定的・絶対的な概念ではない。その本質は社会によって作り上げられ、制度によって再生産されていくものである。障害学の目的は、こうした個人の身体に関わる「能力」とこれを規定する社会の関わりについて考えることにある。本講義においては、盲ろう者の知覚体験を出発点として、個々人の身体と社会の相互関係、そして自己と他者をつなぐコミュニケーションという営為について論じる。受講者には、盲ろう者の知覚世界を疑似体験することで、コミュニケーションのあり方について考えてもらいたい。介助者の存在を通して、コミュニケーションが一方的な情報伝達ではなく、他者との共同作業、そして分有の経験であることを感じてもらいたい。

## 盲ろう者としての生

まずは、私の生い立ちから話していきたいと思います。子供時代は目も見えたし耳も聞こえていたので、みなさんと同じような日常生活を送っていました。小学校 3 年生、つまり 9 歳の時に、目が見えなくなりました。さらに高校 2 年生の時に耳が聞こえなくなり、現在のような「盲ろう者」となりました。私のような「盲ろう者」が社会の中でどれくらいいるかご存知ですか。ヘレン・ケラーはみなさんご存知だと思いますが、日本にはおよそ 2 万人の「盲ろう者」がいます。

「盲ろう者」となって切実に感じたのは、コミュニケーションの難しさです。最初は、点字での筆談を通して、意志疎通を図ろうとしました。金属製の針を使って、手で点字を書くのです。ただし、家族の中で点字が理解できるのは母だけです。父と兄は点字ができないので、点字と漢字を対照させたカードを作って、コミュニケーションをしていました。しかし、これだとコミュニケーションの内容が限定されますし、時間もかかります。

次に考えたのは、点字タイプライターを使用することでした。点字を素早く打つことができるため、コミュニケーションのスピードは改善されます。しかし、点字タイプライターは大きくて重いですし、点字を打ち出す際の音も大きいです。持ち運びには不便なので、例えば歩きながらコミュニケーションをするというのは困難です。また、音がうるさいので、病院の待合室といった場では使用することが憚られます。

そんな時、母が考え出したのが「指点字」でした。タイプライターのキーをタッチする要領で、私の指に触れるのです。この方法であれば、いつでも、どこでも気兼ねなく意志疎通が可能となります。

## 個人の取り組みから社会へ

「指点字」という新しいコミュニケーションの手段が創出され、問題はすべて解決されたと思う方もいるかもしれません。しかし、一旦元気になった私は、再び新しい問題に直面して落ち込んでいくのです。学校で友人と会って、「指点字」で挨拶をすることはできても、コミュニケーションがその先に進まないのです。「コミュニケーションの手段が存在する」ということと「充実したコミュニケーションを実際に享受している」ということはイコールではないのです。会話の手段を獲得しても、これを使って話しかけてくれる人がいなければ、他者と充実した会話を行うことは不可能です。

そんな私を救ったのは、会話の際に相手の言葉を「指点字」として伝えてくれる「通訳者」の存在でした。コミュニケーションが困難な状況において、まずは新しい伝達手段を獲得することが求められます。しかし、そのコミュニケーションを安定・充実したものとするには、さらに一歩進んで制度

的・組織的な取り組みが求められます。私の場合は、「指点字」という新しい伝達手段を、教育を通じて社会的に普及させ、コミュニケーションが円滑に進むよう「指点字通訳者」を養成・派遣できるようなシステムを作り上げることにあります。

「バリアフリー」という言葉はよく知られていますね。障害者にとってのバリアとは、社会的・制度的なものによって作り上げられていることも多いのです。例えば、公務員や医師の欠格事項というのをご存知ですか。障害がある人間は、本人が有する能力の程度に関わらず、国家資格を取得するための試験を受けることすらできないのです。また、プライベートな場における心のバリアも存在します。例えば、障害者との結婚は相手側の家族の反対を受けることがあります。また、住居を探す際には、障害者ということで賃借を拒否されることもあり、困難が伴います。

## 盲ろう者の疑似体験

それでは、盲ろう者の擬似体験をしてもらおうと思います。人間が持つ 5 つの感覚の中で、視覚と聴覚は中枢的な役割を果たしています。これらが遮断された時、どのように外部の情報をキャッチするのか、どのようなコミュニケーションが可能なのかを試行錯誤してみてください。また、盲ろう者の擬似体験を通じて、「支援してもらう」とはどういうことか考えてもらいたいと思います。2 人一組になってください。一方の学生は、アイマスク、耳栓、ヘッドフォンを使って盲ろう者の役をしてください。もう一方の学生は、介助者として自らのパートナーの移動やコミュニケーションをサポートしてあげましょう。

擬似的な盲ろう者となった皆さんには、二つの課題にチャレンジしてもらおうと思います。第一に、盲ろう者役の学生同士で自己紹介をしてください。自己紹介の内容は決めませんが、どうすれば相手に自己の情報を伝達できるか考えてみてください。第二の課題ですが、これは階段を上って 2 階の部屋に行き、そこでお菓子を食べてもらいます。お菓子は 3 種類ありますので、自分が好きなものを選んでください。介助者の人は、どのようなお菓子があるのかを、どうやって伝えるのかがポイントです。

## コミュニケーションとは

コミュニケーションという言葉は、語源を遡ると「分かち合う」とか「一緒に行なう」という意味を持っているそうです。私は自身が盲ろう者となった時、大きな苦しみを味わいましたが、これを通じてコミュニケーションのあり方や自己の尊厳について考えることになりました。人間は異質なものに対して、不安や怯えを感じます。こうした不安の感情を、肯定的なエネルギーへと転化させていく力こそがコミュニケーションなのだと考えています。

（文責：若澤）

BBS（交流論壇）より

◆ **如果福岛老师也有三天光明** もしも福島先生に三日間の光が戻ったら　南京大学学生　2010/03/21 23:21:58

非常感谢福岛老师能够来到南京大学，并做精彩的讲座。和大家一样，我也非常钦佩福岛老师。记得以前看海伦· 凯勒的《假如给我三天光明》，非常感慨。我想知道的是，如果福岛老师也有这样的机会，老师会着重看看这个世界上的哪些东西呢，换句话说，这个世上有哪些东西值得留意呢？希望没有失礼。谢谢！

南京大学へいらっしゃったこと、そして素晴らしいご講義をしてくださったことに大変感謝しております。他の学生と同じように、私も福島先生を大変尊敬しています。私は以前ヘレン・ケラーのエッセイ"Three Days to See"を読んで大変感動しました。もしも福島先生にも 3 日間また世界を見るチャンスがあったら、何を見たいですか。言葉を換えれば、この世界で何が最も気にかける価値のあるものだとお思われますか。以上、失礼がなければ幸いです。

◆ **孤独の持つ意味について**　東京大学学生　2010/03/30 23:06:12

福島先生、南京での集中講義お疲れさまでした。

先生の講義では、宇宙の中でひとりぼっちの状態から、コミュニケーションを回復する過程を通じて、コミュニケーションが人間存在に対して持つ重要な意味を発見する、という方向に重点が置かれていたように思いますが、逆に人間にとって、絶対的な孤独のもつ意味というものはあるでしょうか。

このような問いは、孤独かそうでないかを選べる者だから言えること、という面もあるでしょうが、福島先生のお話は「人間は実は本来的には、皆、宇宙の中でひとりぼっちの存在なのだ」という側面に重点をおいて理解することも可能だと感じました。そのとき、もしかするとコミュニケーションはそのような状況から目をそらせるような麻薬的な効果を持つのかもしれないと思いますし、福島先生が何か考えておられるときには、コミュニケーションがその糧になっているというより、孤独が糧になっている、という印象をうけました。

コミュニケーションは、先生にとっては、常に向き合わざるを得ない孤独からの「救い」ではあるが、先生が本当に考えようとしていらっしゃるのは、むしろ「孤独」と「私」との関係ではないか、と思います。もし、人が何らかの理由で絶対的な孤独の中に置かれてしまった時には、普段周りとの会話や読書などによって作られる「私」というものは極めて脆くて疑わしいものになり、しかし「私」を失うわけにはいかず、やはりゼロから「私」を構成しなければならないのではないか、と想像します。もしそのときの「私」が、それ以前の「私」と違うならば、それはどのように違うのでしょうか。その違いには、絶対的な孤独を潜り抜けた（ないしは常に直面させられている）ことの意味が見出せるでしょうか。

以上につきまして、先生のお考えは如何でしょうか。

追伸：光成さん、ももこさんも、指点字通訳お疲れさまでした。北京空港でお会いした時からお疲れのようで、ずっと心配でしたが、お二人に直接話しかけようとするとすぐ福島先生の手に通訳されてしまって、それでは負担が減らないままではないかと困ってしまいました。こんな集中講義に来てしまうと「自分の時間」がなくなる大変な仕事だと思いますが、本当にお疲れさまでした。

## 福島先生インタビュー

2010 年 6 月 30 日 先端科学技術研究センター 福島研究室

指点字：春野ももこ、小野彰子

### 体験と抽象的思考の往復が大事

**石井**　学生さんの感想の中で、福島先生の授業に対する反響が大変大きかったです。日本人と中国人がペアになって盲ろう体験を行ったことは、障害者と介助者の役割体験でもあったけれど、国をこえたコミュニケーションの体験でもあったようです。

**福島**　体験を通してその他にも考えてもらえることがあれば良かったと思います。相互に理解するとか相手の立場を想像するというのは言うのは易しいけれど、具体的な状況の中でコミュニケーションがどう創造されるかは、体験してみないと分からないし、体験を通して抽象的な概念を再検討しなければならないのだと思います。私自身も抽象的な思考に惹かれるところがあるのですが、私たち盲ろう者はその時その時のサポートがなければどうにもならないということを毎日経験しているので、具体的、現実的対応がその瞬間、瞬間に必要になるということを、誰に言われるでもなく再確認しながら生きているというところがあるんですよね。その点では知識とか抽象的な思考に偏りがちな大学教員という立場にあっても、振り子が逆に振られるという部分が多いので、学生たちにも経験してもらえればと思うんです。

**石井**　体験を通して交流した、或いはしようと努力したことで、結果として今までの自分が壊れたという言い方をする学生さんが多かったです。ある意味目の前の現実から自分自身について考えた結果だと思います。

**福島**　具体ー抽象というのは大事な回路だと思います。

**石井**　南京集中講義は東大の教養教育を国外へ持ち出す試験的プロジェクトですが、教養教育として何を教えるのかという問題にいつもぶつかるんです。そこで私たちが考えているのは「どうやって物事を考えるのかが大切であり、考える訓練をすべきだ」ということです。その意味で疑似体験はすごく響いたし影響力があったと思います。

左から指点字通訳の春野さん・福島先生・指点字通訳の小野さん

**福島**　結局私が何かを教えたのではなく、機会を提供することが問題だと思います。それぞれの経験とか生きてきた環境とかによって考えてもらえればいいんだと思います。

### バリア（制約）を体験して初めて分かること

**石井**　日本と中国の間には歴史的にも文化的にもいろいろなバリアがあります。そのバリアを壊してコミュニケーションを取ることが難しい場合があるんです。でも疑似体験を行った時には両国の学生同士すっと入りこめたのが驚きでした。

**福島**　それは通常のバリアが問題にならないくらい大きなバリアや制約が発生するために、小さい問題が無意味になったということかもしれないですよ。

**石井**　では、障害の世界には、逆にそういったバリアがないのでしょうか？

**福島**　障害を体験することによってその他のバリアが無意味になることはあるかもしれません。例えば耳が聞こえないというハンディを私は持っていますが、他の障害者もいろいろな条件を抱えていると思うんですよね。でもそういう人たちは、生きていく上で小さな問題について他の人ほど気にしていないということはあるかもしれません。何が小さな問題かは分からないけれど（笑）。人によりますが、障害体験というのは災害に遭ったり、事故に遭ったりして、何か特殊な状況に置かれるということと似ていますので、そうすると裸の人間性が問われるんです。例えば戦争体験というのは、多かれ少なかれ、裸の人間が見えてくる状況だと思うんです。極限の状況の中で、その人の本質が見えてくる。日常の中では隠されてしまっているエゴイズムとか、人間の愛とかが見えてくるということがあると思うんです。だけど、障害をどう捉えるかはその人の判断によりますよね。単に不便なだけと思っている人もいますが、私はそうではない面もあると思っている。出会った多くの障害のある人たちの中で、自分のそういう体験を、もちろん不便だとは思っているけれど、それだけじゃないと考えている人は案外多いかなと思います。

**石井**　それだけじゃないというのは具体的にどんなことなんでしょうか。

**福島**　人や状況にもよりますが。例えばコミュニケーションというと、その手段がまずは大事だと思われるけれど、そうではなくて、コミュニケーションする相手がそこにいることが、まず大事です。疑似体験で言えば、手を繋いでいる人が手を繋いでそこにいるということが確かめられるかどうかということであって、離れてしまっては相手がそこにいるかどうかも分からないですよね。身体を触ったりして伝えることが大事で、それはコミュニケーションをする相手が存在するということの象徴だと思うんです。ペ

アになった人がコミュニケーションをするつもりがなかったら、盲ろう者役の人は何も分かりません。盲ろう疑似体験では、反応がゼロだったら何も分からない。もしそれを一般のコミュニケーションの中でやろうと思えば、携帯電話で話していて、相手の話の途中でいきなり電話を切ってしまうとか、相手がそばにいて直接話しかけているのに、完全に無視されてしまうとかですね。こういう状況が現実に生じることを想定すると、どれだけ危うい土台の上にコミュニケーションが成り立っているかということが分かると思うんですよね。コミュニケーションする相手があって、コミュニケーションする気持ちがお互いにある、それが原点でそれ以外は全て二次的なものであるということが、たとえば、「盲ろう」の障害の状況を疑似体験することによって分かってしまう。普段いろいろな言葉を交わしていて、誰とでもコミュニケーションできると私たちは思っているかもしれないけれど、実はそうではないということに気づくと思います。

**言葉の身体活動性**

**石井**　今回、「身体論」というテーマを掲げて、日本と中国の学生さんに議論をしてもらいましたけれども、結局のところはコミュニケーションの学習だったかも知れません。自分たちがどうやって意見を伝え相手を理解できるのかを考える場だったと思います。

**福島**　ただ私自身はコミュニケーションと身体は繋がっていると思うんです。私たちは身体から離れたところでの記号によってコミュニケーションは成り立っていると思いがちです。電子的に操作された回路で通じていればそれで良いと思いがちですが、そうではないと私は思っています。多分本来コミュニケーションで使われる言葉の背景に身体的な経験とか感覚があるかないかで随分違っているのではないかと思うんです。例えばきつねうどん（笑）。きつねうどんという言葉を聞くと我々はにおいを思い出す。でもきつねうどんを知らない人がこの言葉を聞いても、日本のヌードルと言われたって香りを思い出せない。言葉というのは耳で聞いて理解できるということだけでなくて、身体的経験が背景にあるかどうかでリアリティが違ってくるはずなんです。だけど皆それを忘れやすくて、特に抽象的概念を用いる時には、その背景に人々の生の経験や感覚があることを忘れてしまいやすいんです。平和とか戦争とか自由とか抑圧とか、そういう言葉を使う背景にどういう経験や感覚があるのかを知ることが大事だし、そのために言葉によるコミュニケーションがあるはずなのですが、私たちの使う言葉は、だんだん抽象化され、間接化されてしまっていって、何も感じない乾いた記号のコミュニケーションになりがちなんです。コミュニケーションの身体論的な側面がますます重要になってきているんだと思います。

**石井**　その時の身体というのは必ずしも実際にここにある私たちの身体ではなくて、記号としての言葉では通じないようなもののこと全体を指すんでしょうか?

**福島**　そもそも言葉という記号が身体感覚を表す性能はそれ自体にはないと思うんです。身体的な経験とか感覚というのは言葉とは別のものなのかも知れないので、じゃあどうすればいいのか。言葉の担い手が身体的な経験を積み重ね、感覚を大事にすることが一つ、そしてそれをどういう言葉で表現するのかという経験を積むことが次に大事です。背景にある身体感覚とか経験をもとに言葉を紡ぐこと、言葉が自分自身が体験することと繋がると考えないとリアリティのあるコミュニケーションはできないでしょうね。そう考えると、リアリティのあるコミュニケーションとか、心に沁みるコミュニケーションというのは、その人がそれぞれ積重ねてきた経験とか感覚がなかったらそもそもできなくて、そうなると言葉はものすごく希薄な感じになると思います。このことを私は「言語の身体活動性」という言葉を使って表現して来ました。ここで言う身体活動は、声や手など身体を使って行うという意味だけではなく、そのコミュニケーションをするために使う心身のエネルギーや使う言葉の背景に自らの身体経験や感覚などをできるだけ付着させて自然に出てきたような言葉が大事だという意味を込めています。言葉を言葉だけに終わらせないコミュニケーション。言語使用における意味付与としての身体活動について、私たちは忘れがちですが、かつて私たちの先祖や近代以前の人々のコミュニケーションは、記号だけによるものはほとんどなかったんですよね。私たちの言語活動のあり方が抽象化されてしまっていることに対する不安とか危険性についての一つの対応策として身体活動性とか、具体性や現実性を重視する必要があると思います。

**石井**　その「身体活動性」は会って話さなければ伝わらないものですか?　先生はメールをよく確認されていますが、メールのようなひとつひとつの記号の上にも載せられるものだとお考えですか?

**福島**　メールであってもなんであってもとにかく、言葉を使う時に書き手或いは話し手が自らの背景にある経験をぎりぎりまで言葉に結びつけて、リアリティを持たせて使うことが大事で、もちろん、そうして言葉を使ったからと言って伝わるかは確実ではないけれど伝わる可能性はあります。逆に、自分の感覚や経験と乖離した言葉を使っていれば、絶対にリアリティは伝わらない。なぜならそもそも発している言葉にリアリティがないから。つまり、言葉の背景に体験や身体感覚を結びつけることは、コミュニケーションにリアリティを持たせるための十分条件ではないけ

れど、必要条件だと思いますね。メールの言葉という記号であっても、その背後にあるその人の体験や感覚と繋がっているものであれば、その言葉に力があると思うんです。

**他者がいなければ自己がリアリティを持たない**

**石井**　授業では、先生自身が自分のアイデンティティをどう確立するのかという質問がありました。一般的には自分が相手と違うことによってアイデンティティを確立するけれど、先生は相手とつながることによってアイデンティティを確立することもあり得るのか、という質問だったと思います。

**福島**　その時言ったかどうかわからないけれど、自分が他者の存在を認識する時、それは人とつながるということも言えるし、つながるというより……たとえば、宇宙空間でたった一つの恒星が光るだけでは自分の存在は分からないんですよね。光はどこまでも空間に広がってしまって宇宙は暗いままです。私自身も宇宙空間の中で浮かんでいるような状態で生きていますので、自分以外の人間がいるということが分からないと自分の存在は分からない。それは自分の独自のアイデンティティを確認するなどという以前に自分自身がそもそも存在するのかどうかを確認するために他人の存在が必要なんですよね。認識の上ですが、生きている上でのリアリティが希薄になります。これは普通の人ではなかなかない感覚かもしれませんが、ある種の精神状態にある人にはある感覚かも知れません。自分が生きているリアリティが希薄になり、世界が遠のいていくという経験をしている人はいると思います。私の場合、自分がこの世界の中で存在するということが、だんだん分からなくなることがあります。他者とのコミュニケーションをしないと自分の存在が分からなくなるんです。つまり、私しかいないと、私もいないんですよね。私Ｘが存在するためにはＸでないものがいないと Ｘ は存在しないと同じ事です。闇があるから光がある。光だけがあったら光は光ではないです。そういう感じです。

**石井**　コミュニケーションをしていなければ、自分自身がぼやけてしまうというという感覚、それはコミュニケーションを続ける努力をしなければどうしても感じてしまうものなんでしょうか。

**福島**　今言ったような状況は、たぶん多くの人にも似たような経験があって、それが極端になると自殺してしまう。その原因はいろいろあるでしょうけれど、自分が一人しかいないと、この世の中に自分が存在する手ごたえがなくなるということがあると思います。手ごたえがなくなれば、自分がいようがいまいが同じことです。それは他者との関係がきれてしまったからだと思います。家族や友人がいるかどうかは関係なく、自分とは違うところにその人たちがいて、自分とは関係のない状態になってしまうんですよね。そうなると、自分の実感が湧かなくなる。自分が分からなくなると、自分自身が拡大してしまう。自分しかないところには、自分も存在しないんです。なぜ自分が存在するかというと、自分以外の存在が自分の中にあって、それがなぜあるかというと、自分以外の存在とつながった経験があるからです。コミュニケーションするときに相手の気持ちに共感したり、考えを理解しようと思ったりしている時は、疑似的に自分の中に他者が侵入している状態だと思いますけれども、そういう経験があるから、そうじゃない時も自分がリアリティを持つのであって、本質的に自分しかないという状態になったら、自分自身も消えていくんですよね。それがひどくなっていくと、自分の頭の中に自分のことしかなくて、そうして、一時的には自分のことで世界がいっぱいになるけれど次の段階では自分も消えるんだと思います。自分を中心にして考えることは重要だと思います。自分がないと始まらないからね。でもすべてが自分でも始まらない。他者があり自分がある。他者の存在があるという条件があるからこその自分だと思います。

**授業を通して伝えたいこと**

**石井**　この集中講義は来年以降も続けていきたいと思っています。特に中国と日本の学生がいっしょに学ぶということには意味があると思うのですが、そういう場で先生が伝えたいことにはどのようなことがあるかお聞かせ下さい。

**福島**　自分とは違う人が世の中にいるということ、そして違う人とかかわることは案外面白いことだし、それは自分自身の再発見になる、ということです。一言でいえば。それは障害者との出会いかもしれないし、外国人との出会いかもしれないし、或いは身近な人とのかかわりの再発見かもしれないですが、自分と違う異質な他者と関わることの面白さを伝えていきたいと思います。

**石井**　わかりました。貴重なお話を伺えたと思います。有難うございました。　（文責：石井）

# 〈わたしの〉身体と自己決定

## トランスセクシュアル・インターセックスの身体から照射する

清水 晶子

2010 年 3 月 23 日～24 日

### 講義概要

この授業では、〈わたしの身体〉として認識される身体が〈誰の〉ものであるのか考察を行う。また、その身体について〈わたしの〉決定権がどこまで及ぶのかを、トランスセクシュアル及びインターセックスの身体が問題化してきた点を参照しながら考えてみたい。〈わたし〉と〈わたしの身体〉を取り巻く／作り上げる様々な文化的・社会的な制度とが、どのような交渉を行い、どのように共犯関係を結び、あるいはどのような緊張関係をはらんできたのかを討議していく。

### 〈わたし〉と〈わたしの身体〉

〈わたしの〉身体に関わる決定権は誰が持っているのか。〈わたしの〉身体は誰のものであるのか。これを問うことが本講義の目的である。身体とは自己に属するものではあるけれども、〈わたし〉そのものではない。しかし他方で、身体は自己にとっての単なる所有物でもない。我々は身体なくしては存在することはできない。自己がどのような存在であるのか、これは自己の身体をめぐる状況に、大きく左右される。今回は、キャスター・セメンヤの「性別疑惑」問題を事例として、身体をめぐる自己決定の問題について考えていくことにする。

### キャスター・セメンヤの「性別疑惑」

キャスター・セメンヤは南アフリカの女性アスリートであり、2009 年のベルリン世界陸上においては女子 800m 走にエントリーしていた。しかし、他の女性選手を圧倒する身体能力から、彼女の性別について疑念の声が挙げられるようになった。セメンヤの性別を疑問視する声は、世界陸上での出走前からあったと言われる。しかし、これの問題が注目を集めるようになったのは、女子 800m のファイナル（決勝戦）直前に、国際陸連(IAAF)がセメンヤに対してジェンダーテストを実施しているのではないか、という報道が行われたことに起因する。こうした疑惑の中、セメンヤはファイナルに出場し金メダルを手にした。しかし、「性別疑惑」問題がメディアの注目するところとなり、ジェンダーテストによって女性であることが立証できない場合、金メダルを剥奪される可能性が生まれた。セメンヤは「女性」として競技に参加したわけであるが、その自己決定が認められない場合、誰が・どのような形式によってこれを規定するのか。討議においては、セメンヤの性別疑惑に対する IAAF の対応の是非をテーマとした。IAAF の対応を支持するとするならば、どのような点において支持できるのか。あるいは支持できないとすれば、どういった点が問題であったのか。

### グループプレゼンテーション

**グループ①**　ジェンダーテストを実施した点について、IAAFを支持します。もちろん「本人が自身の性をどう思っているか」は大事ですが、このようなスポーツ競技においては客観性がポイントになります。公平性を担保するために、科学的な手段を用いて彼女を検査したことは必要な措置でしょう。

**グループ②**　IAAF の対応を支持することはできません。ジェンダーテストを実施した彼らの行為は、セメンヤ選手のプライヴァシーを侵害しています。18 歳の女性にとって、自身の身体に関する情報が世界中に知られたのは、どれほどの苦痛でしょうか。また、彼女 1 人が検査を受けたことも公平さを欠くと思います。

**グループ③**　ジェンダーテストの実施に関しては支持します。しかし、これは競技が行われる以前に実施されるべきでした。セメンヤ選手のような事例は、「第三の性」として認定し、特別枠を設けて競技に参加することを提案します。

### 誰がどこに存在することができるのか

セメンヤのように、身体の在り方が外部の存在によって規定

されることは、身近なところにも見られる。例えば、国境やパスポートの存在も我々の身体の在り方を規定する。自身に付与される国籍によって、身体の移動は制限を受けることになる。あるいは患者を収容する病院や犯罪者を収監する刑務所も、個人の身体の移動を他者が制限するものである。黒人居住区に代表されるような居住地域の指定や、第二次世界大戦の際に見られた強制収容所なども、その一例として挙げることができる。身体の存在や移動の規定は、必ずしも強制的なものとして現れるわけではない。例えば、階級や所得による住み分けは、強制されて発生するものではないが、我々の居住の様態を規定する。

個人の身体の在り方を、当事者以外の存在が規定することは古くから行われていた。西洋社会において、女性たちはコルセットを着用することで社会が「適切」とする身体へと自らを近づけようとした。科学は必ずしも客観的・中立的な立場を保ってきたわけではない。優生学によるジェノサイドや強制断種である。また、「適切」な身体をめぐる問題は、再生産をめぐる問題としても現れる。例えば、避妊や中絶の権利が挙げられる。性的自由は、性産業に従事する女性の自己決定権が取り上げられる際、特に問題化される。

## トランスジェンダー・トランスセクシュアル・インターセックス

トランスジェンダーの人々は、医学が付与する性別に違和感を持ち、性別の認識に関わる自己決定権を奪回しようと試みた。そして、市民社会に溶け込むのではなく、自らが持つ差異を可視的にすることで、自らの性自認や自己決定を抑圧する社会に対して、対抗的な姿勢をとっていくようになる。このような姿勢は、エイズ・パニックによって溶け込みの限界を感じていたクィア・アクティビズムにとって、インパクトが強いものであった。差異を隠さずに主張するジェンダー越境者たちは、こうした運動において象徴的な存在として位置づけられるようになった。

医学から自己決定権を奪回すれば、問題は解決するのだろうか。トランスジェンダーにおいては、身体そのものの在り方よりも、身体に対する認識、特に性自認に関わる決定権が争点となっていた。これに対して、身体そのものの在り方、身体の改変に対する決定権が争点とされるのが、トランスセクシュアルの人々である。トランスセクシュアルの場合、自己の身体認識と外界に対して向けられた身体形状の間に不一致が起っている。トランスセクシュアルの人々は、違和感のある身体を自らの身体として取り戻すことを希求する。その手段となるのが性別適合手術である。従って、トランスセクシュアルにおいては、医学と協調しながら自己決定権を行使していく必要が生まれる。

インターセックスとは、外性器・内性器・ホルモン系・染色体が、「一般的」とされる「男性」・「女性」と異なった状態を指す。インターセックスの症状は非常に多様で、その範囲も定義によって左右される。性染色体と身体的な外観の不一致や、二次性徴が起こらないといった症例もインターセックスの一例とされる。現在では、性分化発達障害(DSD)という呼称が一般的に使用されている。インターセックスの運動が問題としたのは、主として二つのポイントである。第一に、インターセックスの当事者に対して、適切な情報が与えられず、その手術の存在すらも隠蔽の対象となっていたことである。性器形成手術は、本人に対してフラッシュバックの経験を残したり、性感覚の喪失をもたらしたりすることがある。しかし、自身の身体について必要な情報が隠蔽されているために、当事者はその苦しみの対処法が分からず、孤立した状況の中で苦しむこととなる。第二に、性器形成手術の必要性そのものが問題化されることとなった。この手術は性器の外見を「修正」するものであり、当人の健康状態の改善・向上に寄与しているわけではない。インターセックスを手術によって「修正」することを求める、社会構造やその価値規範が批判の対象となったのである。

## ではどうすれば……

今回の講義は身体を巡る自己決定の問題を扱ってきた。しかし、勘違いしてはいけないのは、「無制限に自己決定権を認めれば、問題がすべて解決する」わけではないことである。こうした問題では多様な当事者が存在し、その求めるところも一様ではない。それゆえ、問題の一般化やすべてに適応可能な原理・原則を提示することが難しい。問題を一般化するよりは、むしろ身体をめぐる自己決定の問題が、自分が日常生活で抱える問題や違和感とどうつながってくるのか考えてほしい。こうした問題を見つめる自己を、特権的なメタな位置に置くのではなく、1 人の当事者として思考してほしいのである。

（文責：若澤）

## 清水先生インタビュー

2010 年 6 月 9 日　駒場 9 号館 LAP（EALAI）会議室

### 駒場の教養教育を南京へ

**石井**　清水先生は今回で 3 度目の南京ですね。今年の集中講義はいかがでしたか?

**清水**　今年はオーディトリアムでの授業だったので、教えにくさがありました。場の距離とでもいうのでしょうか。

**石井**　大教室の授業だと、どうしてもテレビを見るような感覚になってしまうので、これは次年度の検討課題ですね。集中講義の良さの一つは、インタラクティヴに先生と学生が交流できるところにあるわけですし。

**清水**　駒場の特徴として、教員と学生の近さが挙げられると思うんです。ゼミ室で机を囲んで議論しあうような。自分の研究室で授業をされる先生も多いですし。もちろん教員と学生では力関係も立場も違いますが、そういった雰囲気の中で出てくる発言がとても重要ではないでしょうか。駒場の教養教育を南京大学で展開していく上で、「言いたいことがあったらいつでも言える」という感覚を、現地の授業でも伝えていくのが一番「駒場っぽい」のではないかと思っています。

### 学生交流と TA

**石井**　今回の集中講義では、初めて東大側の学生さんたちが参加することになりました。これはいかがでしたか?

**清水**　今回東大の学生さんを連れていくことになったのは、私にとってとてもやりやすかったです。南京の学生さんが何を考えているのか、これまで直接聞くきっかけがなかったのですが、東大の学生さんを通じて彼らが何を考えているのか聞くことができた。

**石井**　教員に対する尊敬が強い南京の学生にとっては、先生に質問に来るのは少し恐れ多いのかもしれませんね。

**清水**　授業の後の討論会で、大学院生が TA 的な役割を担ってくれたのもよかったと思います。教員に聞けないことでも、先輩であれば気軽に質問したり、意見をぶつけたりすることができますから。彼らの発言がきっかけとなって、学生同士の議論が活発になっていました。学生交流には学部 1～2 年生だけではなくて、大学院生も巻き込んだ方がいい理由は、まさにここにあります。講義を行う先生が、ゼミ生を TA として連れて行って、議論をリードしてもらうというのも一案だと思います。

**石井**　学生同士の議論と言えば、今回の授業ではグループワークが取り入れられていました。

**清水**　グループワークを取り入れたのは、よかったと思います。もちろん改善の余地はありますが、グループワークを行うということ自体は、これからも続けていくべきでしょう。

**石井**　学生が生き生きしていましたね。セメンヤの性別判定問題に関して、中国の学生さんたちの多くが「判定すべき」という立場に回ったのも意外でした。

**清水**　グループによって、一つの意見にまとめようとするグループと、あくまでお互いが意見を譲らずに複数の意見を発表するグループに分かれて面白かったですね。

### 中国でジェンダーについて語る

**石井**　ジェンダーの問題を中国で語ってみて、どういった印象を持ちましたか?

**清水**　どこまで伝わっているのかが、今までは見えにくかったんです。今回は具体例があったのと、東大の学生さんを通じて南京の学生さんと話す機会があったので、彼らが自分の問題と接続して考えようとしてくれているんだなという様子が感じられました。単に珍しいとか、今まで聞いたことがなかった、というレベルを越えて。

**石井**　学生交流で婚前交渉の是非について話をしている学生もいましたね。

**清水**　自分の気になっている問題と接続して、これを契機に話をしようという気になってくれる、ここが一番のポイントなんです。私の言ったことは全部忘れてくれてもいいので。

**石井**　日本人もこういう場がないと話したり、考えたりする機会がありません。そういった点で、日本人と中国人の学生が深いレベルで価値観をぶつけ合うには面白いテーマでした。

**清水**　駒場の学生さんは、物事を「第三者的」に見る傾向があると思うんです。物事に対して多角的なアプローチはできるのだけど、自分は「メタ的」な立場にいるというか、当事者であることを避けようとする。だからこそ今回の南京での体験は、「じゃあ、あなたはどうなの?」という問いに応答せざるをえない契機になったのではないかと。ニュートラルな「私」ではなくて、東大とか日本というバックグラウンドを背負った上で話さなくてはいけなかったから。これは身体論というテーマ的にも上手くいったと

思います。

**石井**　「頭でっかち」にならない。

**清水**　せっかく南京の学生と交流するなら、同じ問題に関して「背負うものはお互い違う。じゃあどうすればいいか」ということをぜひ考えて欲しいです。

**石井**　もちろん「日本人と中国人」という視座は必要なのですが、一人の人間として相手と向き合う姿勢ができる、「人間としての相手への信頼」が形成出来れば、このプログラムは成功ですね。学問って突き詰めていけば、最終的に「人間」の問題に行きつくと思うのですが、どうでしょうか?

**清水**　「教養教育」ってそういうことなのかもしれませんね。

**南京大学集中講義のこれから**

**石井**　これからの授業展開で考えていること、課題だと思っていることはありますか?

**清水**　対象とする南京の学生を日本語学科に限定するのか、それとも日本語ができない他分野の学生にも開いていくのかが、課題だと思います。なるべく多くの学生に講義を聞いてほしいですが、対象が定まっていないと講義の運営は難しくなります。南京における集中講義のターゲットをどこまで絞り込んでいくか。

**石井**　学生の多様性と授業の密度をどう両立させていくかという問題ですね。

**清水**　関連する問題で、集中講義の規模が挙げられます。今回の集中講義・学生交流が上手くいったのは、人数の規模が大きな成功要因になっていると思うんです。お互いに顔が見える少人数の交流だったからこそ、学生同士がその場だけ限りのコミュニケーションではなくて、本音をぶつけ合える雰囲気が生まれたのでしょう。もちろんなるべく多くの学生に対して、国外に行く機会を提供するのは大事なんだけれども、一人一人の顔が見える程度の小さなグループでないと密な交流は生まれてこない。大勢の学生を派遣しても、荷物のように空港から大学に運ばれて、授業を受けるようになってしまったら意味がないんです。

**石井**　清水先生が最初におっしゃっていた、机を囲み合う「駒場っぽさ」の雰囲気ですね。「文理融合」が集中講義の大きなテーマですが、お互いが顔の見える距離で議論するというポイントも大切にしていかなければいけませんね。

**清水**　今回の講義は、ジェンダーの問題を正面から受け止めてくれる学生がいて、今年の集中講義は私自身にとっても学ぶところが大きかったです。

（文責：若澤）

# 編集後記

南京大学集中講義は、文理様々な分野の先生の講義を1ヶ月間連続して行う点が特徴です。専門分野特有の予断に陥ることを避ける意味で、「身体」という具体的で身近なテーマ選択はとても分かりやすく、文系で研究をしている私にも、理系とはどういう考えに基づいて、普段の研究はどんなことをしている人たちなのか、具体的なイメージが掴めてとても参考になりました。確かに東京大学は教養課程で専門の枠を超えた多くの講義を聴くことができますが、専門課程や進路、つまり今とこれからの自分を考えるうえで、実際には往々にして人と人のつながり、例えば南京で中日双方の学生に先生を交えて一緒に食事をしたりといったことが重要なのではないでしょうか。その雰囲気を伝えることは難しいですが、それができれば、より良い報告集になったと思います。また最後になりましたが、今回の講義を企画・運営してくださったLAPの先生方とスタッフの皆様、南京で共に過ごした学生の皆さん、ありがとうございました。

（TA　杉谷　幸太）

今回の集中講義では、身体についての問題提起が、異文化に生きる他者への問いに繋がっていきました。身体への問いかけは、その身体が置かれた歴史・社会・文化的背景への眼差しと切り離すことができません。異なった環境に置かれた他者が、どのような身体認識の下で生を営んでいるのか。南京という場は、このような議論を進めていく上で刺激に満ちていました。異なる専門領域、異なる年齢、そして異なる国籍を持ったメンバーが集まり、講義に参加し、議論を重ねることは稀有な体験だったと思います。多様な背景を持ったメンバーが、南京大学で一つの場を作り出していくプロセスこそが、まさに集中講義の魅力と言えるのではないでしょうか。毎年進化を続ける集中講義ですが、今後とも運営・交流の場に関わっていければ幸いです。LAPスタッフの皆様、そして石井先生、ありがとうございました。

（TA　若澤　佑典）

ふとしたご縁でお手伝いさせて頂くこととなった今回の集中講義「身体論」ですが、ごく身近な「身体」というテーマを主軸に、様々な分野の先生方が多様な角度から切り込んでいくという講義全体の面白さと、更にそこに10名ほどの東大学生を一緒に送り込み、南大学生と共に受講させ、討論・学生交流を図るというプログラムとしての面白さに引き付けられました。南京大学の学生さんたちも皆とてもレベルが高く、講義のアカデミックな広がり・深みと合わせ、これに参加する東大の学生さんたちには本当に強い刺激になると信じております。今回の報告集では、BBS を通じた教員と学生のやり取りだけでなく、更に教員側にこの集中講義について伺ったインタビューの書き起こしも含めたことで、集中講義の様子をより多角的に振り替えることができる構成になったのではないでしょうか。今回の経験を活かし、次回、更にはそれ以降の集中講義やテーマ講義につなげ、より意義のあるものとしていきたいと考えております。

（特任研究員　赤木　夏子）

坦々麺を食べながら清水先生と講義テーマを話し合ったのは、もうずいぶん前のような気がする。唐山椒がフワッと鼻を刺激した時、清水先生が言った。「身体を中心にした講義だったら、私も聞いてみたい」。1 年を通した講義テーマが決まった。「身体論」は思った以上に広がりのあるテーマで、福島智先生の授業では日本と中国の学生さんが一緒に盲ろう体験をした。どうやって意思疎通をするんだろう?　盲ろう者役の日本人学生と介助者役の中国人学生、手に漢字を書いたり合図をしたり、不思議なことに現実世界よりずっと積極的に意思疎通をする姿が目に飛び込んできた。一つのテーマを真剣に考える時、国籍は邪魔をしないし、身体に障害を持った時、コミュニケーションはより積極的になった。博論を執筆しながら企画運営した集中講義。辛かったけれど、頑張った分だけ跳ね返ってきた。

（特任講師　石井　弓）

# 協力者一覧

■ 執行委員長 Chief of Executive Committee

刈間 文俊 KARIMA Fumitoshi

■ LAP 特任講師 LAP Project Assistant Professor

石井 弓 ISHII Yumi

■ LAP 特任研究員 LAP Project Researcher

赤木 夏子 AKAGI Natsuko

■ 集中講義 TA Teaching Assistants

杉谷 幸太 SUGITANI Kota

若澤 佑典 WAKAZAWA Yusuke

■ 報告集執筆 Writers

杉谷 幸太 SUGITANI Kota

若澤 佑典 WAKAZAWA Yusuke

赤木 夏子 AKAGI Natsuko

石井 弓 ISHII Yumi

■ 報告集編集 Editor

赤木 夏子 AKAGI Natsuko

■ 協力 Cooperation

浜口 一恵 HAMAGUCHI Kazue

岩田 以都子 IWATA Itsuko

2011 年 12 月発行

東京大学リベラルアーツ・プログラム（南京）

東京都目黒区駒場 3-8-1 東京大学駒場キャンパス 9 号館 301 〒153-8902

(03)5465-7671

admin@lap.c.u-tokyo.ac.jp

http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/